

『創価教育学』誕生の時期をめぐる

—牧口常三郎と戸田城聖の対話を手がかりに—

塩原将行

はじめに

1. 「創価」という言葉の誕生の時期を顧みる
 - a. 誕生の時期に関する戸田城聖の発言
 - b. 誕生の時期に関するいくつかの所説
 - c. 誕生の時期に関する問題提起
2. 『創価教育学体系・第1巻』出版以前
 - a. 『体系』の構想の形成過程
 - b. 1929（昭和4）年から1930（昭和5）年の著作における「創価」の記述
3. 『創価教育学大系概論』
 - a. 『大系概論』の作成年
 - b. 『大系概論』作成の目的
4. 『小学校長登用試験制度論』
 - a. 奥付についての疑義
 - b. 『制度論』の出版時期
5. 1929（昭和4）年の牧口自筆年賀状
6. 『聖教新聞』連載の妙悟空著「人間革命」
 - a. 妙悟空著「人間革命」執筆の背景
 - b. 『体系』出版前後の記述が混乱しているに見える理由

さいごに

はじめに

本学の歴史を顧みるうえで、まず、最初に必要なことはなにか。それは、本学の名称である「創価」は何に由来するのか、ということであろう。

周知のように、「創価」は、1930（昭和5）年11月18日に出版された、牧口常三郎著『創価教育学体系・第1巻』（以下、『体系・第1巻』と略記）によっている。しかしながら、大正から昭和初期における進歩的な知識人たちの間に共有されていた「価値創造」という言葉が、牧口常三郎と戸田城聖（本名甚一、当時は、城外と名乗る）との対話のなかで「創価」と凝縮された、その

年については、必ずしも定かになっていない。というのは、その時期をめぐって、ある文献では「昭和5年2月」、また別のものでは「昭和4年」等と、異なった記述がなされているからである。

そこで、本稿では、その誕生の時を可能な限り特定し、あわせて、その前後の事実関係を明らかにすることを目指したい。なぜなら、昭和初期における「創価教育学」の誕生の経緯を正確に把握しておくことは、今後の創価大学史編纂の第一歩になると考えるからである。

1. 「創価」という言葉の誕生の時期を顧みる

a. 誕生の時期に関する戸田城聖の発言

最初に、1950（昭和25）年11月12日、牧口常三郎の七回忌法要⁽¹⁾における戸田城聖のあいさつを紹介する。『戸田城聖全集』収録の文献の中で、「創価」という言葉の誕生について直接触れているのはこれだけである。後述するように、それ以外にも、『聖教新聞』に連載された妙悟空（＝戸田城聖）著「人間革命」（以下、「人間革命」と略記）があるが⁽²⁾、「創価」という言葉を戸田と共に生み出した牧口が、このことに言及した文献は見えていない。

思いかえすれば、先生の価値学説ご研究のとき、先生は、「戸田君、小学校長として教育学説を発表した人は、いまだ一人もいない。わたくしは白金小学校長を退職させられるのを、自分のために困るのではない。小学校長としての現職のまま、この教育学説を、今後の学校長に残してやりたいのだ」と申されました。

忘れもいたしません。夜の十二時まで、二人で火鉢をかこんで、わたくしの家で、こんこんと学説の発表について語りあいました。

「よし、先生、やりましょう」と申しあげると、先生は「戸田君、金がかかるよ」と申されました。

わたくしは「わたくしには、たくさんはありませんけれども、一万九千円のもの、ぜんぶ投げ出しましょう」と申しあげ、また「先生の教育学は、何が目的ですか」といいますと、先生はおもむろに「価値を創造することだ」と申されました。

「では先生、創価教育、と決めましょう」というぐあい、名前も一分間で決まったのです。

以来、幾多の変遷をして、印刷にとりかかりましたが、思うようにできず、先生もひじょうにお苦しみになりました。そこで、わたくしが「先生、わたくしが、やりましょう」と申しましたが、先生は、わたくしに文筆の能がないのを憂えて、わたくしに苦勞をかけまいとして、こばまれましたので、わたくしは「先生、戸田が読んでわからないものを出版して、先生は、だれのために出版するのです。先生は、世界の大学者に読ませるのですか。戸田が読んでわかるものなら、わたくしが書けます」といったことをおぼえております。

先生の原稿は、ときおり先生が思いつくままに、ホゴ紙のようなものにきれぎれに書いたものですから、二度も三度も同じようなものも出てきます。重複するものはハサミで切って除き、わたくしの八畳の部屋いっぱい、一きれ一きれならべてみると、まったく一巻の本になるのです。わたくしは、先生の原稿を、第三巻まで整理いたしました。

(1) 七回忌法要の後行われた創価学会第5回総会において、戸田は同会理事長を正式に勇退している。経営する事業の破綻の影響が、同会に及ぶことを恐れての決断であった。戸田が、創価大学の構想を日本大学の食堂で昼食をともにした池田大作に語ったのは、この4日後である。

(2) 後に出版された単行本の妙悟空著『人間革命』（精文館書店 1957年、和光社 1962年）及び『戸田城聖全集・第8巻』（聖教新聞社 1988年）収録の『人間革命』には、「創価教育学」誕生の部分は含まれていない。

その後、わたくしの手で第五巻まで出版しまして⁽³⁾、総会をかさねること数回、先生もわたくしも、この会場がこの信仰者によってあふれることを念願したのです⁽⁴⁾。

このあいさつで戸田は、「では先生、創価教育、と決めましょう」と述べているが、それは、文脈でもわかるように牧口の「価値学説」、「教育学説」の総体を意味している。「人間革命」では、「創価教育学」とはっきり書かれている⁽⁵⁾。

そのため本稿のタイトルは、「創価教育学」の誕生とした。しかし、2b.でも触れるが、牧口は、論文において「創価目的」「創価作用」「創価活動」という用語も使っているので、本稿の中では、『創価』という言葉の誕生」と表現した。

b. 誕生の時期に関するいくつかの所説

ここで、問題点を整理する意味で、「創価」という言葉の誕生の時期についての各説とその代表的文献と出処を挙げる。

イ) 1930(昭和5)年2月説

「創価」という言葉の誕生を「1930(昭和5)年2月」としている代表的な文献は、2003年出版の『三代会長年譜 上巻⁽⁶⁾』である。同書では、その項目の説明として牧口先生七回忌法要における戸田のあいさつを掲載している。しかし、ここには時期を示す表現はない⁽⁷⁾。

「1930(昭和5)年2月」の出処としたのは、この七回忌法要の1年半後の「人間革命」の記述である。そこでは、冒頭、「昭和五年の二月外には星も見えぬ雲の下を東京の冬特有の冷たい風が吹いていた。十二時を打つたのが五分程前⁽⁸⁾である⁽⁹⁾」(下線筆者)で始まり、「創価」とい

(3) 『新教材集録』第4巻第7号(日本小学館 1934年7月)、13頁の「創価教育学説実際状況」には、「氏の学説、全部の体系は全十三巻よりなる大部のものにして、(中略)今秋第五巻を発表し、この全五巻にて根本学説は完成されるので、あとの八巻で各科に亘つてその実際指導案が説いてある」とあり、同書、13-15頁の「創価教育学」には、第5巻「教育方法論=学習指導論」の内容が「学習指導即教導論」として紹介されている。なお、本稿においては、引用文献については基本的に旧字を新字に直している。

(4) 戸田城聖著『戸田城聖全集・第3巻』(聖教新聞社 1983年)、417-418頁。初出は、戸田城正「故牧口先生追憶の辞」『大白蓮華』第13号(聖教新聞社 1951年)、22頁。第13号のみ、目次・本文とも「城正」。

(5) 妙悟空著「人間革命」「牧田先生(四)」『聖教新聞』第39号(聖教新聞社 1952年5月20日)、1面には、「『それにしては、どんな名前にしようかな』『先生の価値論は、価値を創造すると云うのですから、価値創造哲学でも教育学でも、おかしいですね』『創造教育学と云つてもおかしいな』『イツソの事先生、創造の創と価値の価を取つて創価教育学としたらどうですか』『うん、よかろうそれに限る』牧田先生は創価教育と低くつぶやいて巖さんの顔を見てニツコリ笑った」(下線筆者)と書かれている。

(6) 三代会長年譜編纂委員会編『三代会長年譜 上巻』(聖教新聞社 2003年)、106頁。

(7) 前掲『戸田城聖全集・第3巻』、417頁。

(8) 当時の山手線は、午前1時過ぎまで運行している(『汽車時間表』第6巻第10号、日本旅行協会、昭和5年10月)。

(9) 前掲「人間革命」「牧田先生(一)」『聖教新聞』第36号(聖教新聞社 1952年4月10日)、1面。なお、1950年11月12日の牧口初代会長七回忌法要のあいさつでは、「夜の十二時まで」と述べている。十二時以降とする「人間革命」とは異なる。

う言葉が誕生した時の牧口と戸田の対話とその後の経過を詳述している⁽¹⁰⁾。

ロ) 1929 (昭和4) 年説

このような当事者の一人である戸田の記述がありながら、「1929 (昭和4) 年」とした文献がある。その代表的なものは、1993年に出版された『年譜・牧口常三郎 戸田城聖⁽¹¹⁾』である。筆者も2001年に『創価教育の源流 牧口常三郎』の年譜の執筆依頼を受けた際、「創価」という言葉の誕生については『年譜・牧口常三郎 戸田城聖』の記述に従い、「昭和4年2月」とした⁽¹²⁾。

しかし、その後いくつかの新資料に接し、むしろ1930 (昭和5) 年2月ではないかと考えるようになり、『三代会長年譜 上巻』の編纂にあたっては、同年2月とすべきではないかとの意見を述べた。今回本稿の執筆に取り組んだのは、かねてよりその責任を感じていたからである。

『年譜・牧口常三郎 戸田城聖』が、その出処としたのは、1972 (昭和47) 年11月18日に出版された美坂房洋編『牧口常三郎』である。同書には、次の記述がある⁽¹³⁾。

既に、牧口は昭和四年の知人に宛た年賀状には「創価教育学の研究が進んでいる」と書いているし、同四年九月八日発行の小冊子「小学校長登用試験制度論」には「これは私が近く発表せんとする創価教育学の実際的研究の一節である」と記している。

しかしながら、同書の巻末の年譜には、「1930年 (昭和5年) 59歳」の項目に、「戸田城聖と二人で創価教育学会結成の構想を固める」とあるだけで、「創価」という言葉の誕生について、昭和3年にも昭和4年にも記述がない。2つの新資料を提示しながら、同書は年譜でその時期に触れていない⁽¹⁴⁾。

美坂『牧口常三郎』は、1971 (昭和46) 年6月1日から1972 (昭和47) 年7月31日まで、『聖教新聞』に連載した「牧口常三郎伝」の記事に加筆・訂正を加えたものである。新聞では、この年賀状や『小学校長登用試験制度論』(以下『制度論』と略記) についての記述はない⁽¹⁵⁾。この部分は、単行本にする際に加筆された⁽¹⁶⁾。

⁽¹⁰⁾ 当時、戸田の秘書として、「人間革命」の口述筆記を担当した山浦千鶴子は、「『人間革命』に) 創価の命名が昭和5年2月とあるがそのまま受け止めていいですか」との質問に対して、「創価は (昭和) 5年です」と答えている (中本博の2003年2月10日取材メモによる)。

⁽¹¹⁾ 年譜・牧口常三郎 戸田城聖編集委員会編『年譜・牧口常三郎 戸田城聖』(第三文明社 1993年)

⁽¹²⁾ 『創価教育の源流 牧口常三郎』(潮出版社 2001年)、103頁。

⁽¹³⁾ 美坂房洋編『牧口常三郎』(聖教新聞社 1972年)、106頁。

⁽¹⁴⁾ 同上、506頁。

⁽¹⁵⁾ 「牧口常三郎伝 (17)」『聖教新聞』第3262号 (聖教新聞社 1971年6月22日)、1面。『小学校長登用試験制度論』は、1965年に出版された東西哲学書院発行の『牧口常三郎全集』には収録されていない。それ以降に発見されたものか。

⁽¹⁶⁾ 逆に、その証言の信憑性からか、もしくは、読者の混乱を避けるためか、以下の聞き書きを削除している。「これは、創価教育学会が軌道に乗った昭和十二年ごろ、こんな話があったことからもうかがえる。教育者グループの一人が牧口会長に『創価教育学会の始まりはいつですか』とたずねた。『過去のことを詮索する必要はない。それよりも前進のためにこれからどう取り組んでいくかを考えるほうが大事だ』

なお、『年譜・牧口常三郎 戸田城聖』における「1929（昭和4）年説」は、美坂『牧口常三郎』を出处としているが、同書の牧口自筆年賀状についての記述は、その考慮からは外している。

ハ) 1928（昭和3）年説など

熊谷一乗と西野辰吉は、美坂『牧口常三郎』の記述に基づき、以下の見解に立つ。

熊谷は、美坂『牧口常三郎』の前年、1971（昭和46）年11月18日に出版された『牧口常三郎一人と思想—⁽¹⁷⁾』において、「創価」という言葉の誕生の時期を、「昭和五年の二月ごろ、牧口と戸田が会ったさい、話が牧口の新しい教育学説のことにおよんだ⁽¹⁸⁾」と記述し、1930（昭和5）年とした。しかし、1994（平成6）年に出版された『創価教育学入門⁽¹⁹⁾』では、この牧口と戸田との対話には触れないで、美坂『牧口常三郎』の1929年元旦の知人宛年賀状と1929年に発行された『制度論』に「近く発表せんとする創価教育学の実際的研究中の一節」という文言があることを引き、「牧口が『創価』をキーワードにして蓄積されたメモ・資料を整理し『体系』の著述に本格的に取り組むにいたったのは、1920年代後半（大正末期から昭和初年）とみてよいだろう⁽²⁰⁾。」と、『体系』の成立過程への踏み込んだ言及を避けている。

西野は、1985（昭和60）年に出版された『伝記 戸田城聖⁽²¹⁾』において、「戸田城外はのちに『人間革命』という小説を『聖教新聞』に書いているが、（中略）牧口が、『創価教育学体系』の著作にとりくむようになる場面もえがかれているけれども、牧口の退職のいきさつなどとごっちゃになって、時間の経過が正確にえがかれているわけではない」と述べ、「推測で昭和三年のある日の会話」として、戸田が「創価教育学」と名づけた場面にふれている⁽²²⁾。西野は、前述の知人宛年賀状が頭にあってか、1928（昭和3）年説に立つ。

なお、美坂『牧口常三郎』では取り上げていないが、西川喜萬は、1947（昭和22）年の創価学会第2回総会において、「学会名称と発生年時 価値創造をモットーとする所以と誕生は、昭和二、三年頃⁽²³⁾」と述べている。西川は、創価教育学会の理事の一人であった⁽²⁴⁾。この発言は、戸田も出席している創価学会総会での発言であり、当時の創価学会機関紙『価値創造』に掲載された

と答えた牧口会長……。ところが、その後、戸田会長が五月晴れの空に泳ぐこいのぼりを見ながら『今年もまた記念日がやってきたな』と、ふともらした。そこに居合わせたその人が『そうしますと、創価教育学会が始まったのは昭和五年五月五日ですか』と念を押すと、戸田会長は『あっ、口をすべらせてしまった』と苦笑したという話がある（同上「牧口常三郎伝（17）」）

(17) 熊谷一乗著『牧口常三郎一人と思想—』（第三文明社 1971年）

(18) 同書、91頁。『聖教新聞』の連載には、「創価」の言葉の誕生についての記述はない。熊谷は、「人間革命」に基づいたのか。

(19) 熊谷一乗著『創価教育学入門』（第三文明社 1994年）

(20) 同書、21頁。

(21) 西野辰吉著『伝記 戸田城聖』（第三文明社 1985年）

(22) 同書、95—97頁。

(23) 西川喜萬「学会の経過報告」『価値創造』第7号（創価学会 1947年11月）、20頁。

(24) 西川は、創価教育学会の第5回総会で閉会の辞を述べている（『大善生活実証録—第5回総会報告—』、創価教育学会 1942年、48頁）。

発言要旨である。

c. 誕生の時期に関する問題提起

イ) 期間区分の設定と第一段階としての絞り込み

このように「創価」という言葉が生まれた時期についての見解が分かれているので、1927（昭和2）年から1930（昭和5）年6月15日までの期間を、一年間を更に4つに分けて検討を進める。区分を表わす記号の数字は、和暦（昭和）を意味し、次のAからDは、1年間を4つに分けた期間区分を意味する。

〈表1〉「創価」という言葉が生まれた時期を考えるための期間区分

年	1～3月	4～6月	7～9月	10～12月
1927（昭和2）年	2 A	2 B	2 C	2 D
1928（昭和3）年	3 A	3 B	3 C	3 D
1929（昭和4）年	4 A	4 B	4 C	4 D
1930（昭和5）年	5 A	5 B*	—	—

*6月15日まで。

※ 前述の西川発言を踏まえ、1927（昭和2）年以降を検討の範囲とした。

※ 1930（昭和5）年6月15日に出版された『推理式指導算術』には、「創価」という言葉が出てくるので、ここまですべての範囲とした。

最初に、次の2つの条件を満たす期間区分に絞り込む。

第一の条件。「創価」という言葉が生まれた直後から、牧口の書いた原稿の整理を須藤一⁽²⁵⁾が行っている。当然、彼がそれに従事できる時期でなくてはならない。

七回忌法要のあいさつでは個人名をあげていないが、途中から戸田が牧口の原稿の整理を行うことになったと述べている⁽²⁶⁾。「人間革命」では、牧口の原稿整理を最初札幌師範学校出身の須藤に頼んだ⁽²⁷⁾が思うようにまとまらなかったため、戸田が申し出てまとめることになったと記

⁽²⁵⁾ 北海道師範学校一部を1925年3月に卒業（『昭和18年3月同窓会会員名簿』、北師同窓会、1943年、60頁）。その後、岩見沢尋常高等小学校に1925年3月から1928年3月まで勤務した。同校には、牧口の父違いの弟、柴野和一郎の次女タカが、須藤の在職期間と重なる1925年11月から1926年1月まで勤務している（牧進編『昭和35年7月会員名簿』、岩見沢小学校、1960年、8頁）。柴野タカは、牧口宅で行儀見習いをしており、須藤は、その縁で時習学館に勤めるようになったという推測もできる。柴野タカについては、高澤壽民著『しなやかに動く一母への追悼史と自分史』（私家版 1995年）、5-12頁参照。前掲の西野『伝記 戸田城聖』、103頁には、「（森田は）一年半ほど時習学館を手伝ったが、昭和五年にやめて樺太にいった。師範出では北海道出身の須藤一も、時習学館を手伝ったが、森田と前後してやめて、東京の小学校に就職していた」とある。須藤一「流に漂い生きて五十年」『五十年』（札幌卒業十四年会 1974年）、31頁には、「昭和六年（日大）専門部卒業と同時に小松川第一尋常高等小学校に就職」とある。

⁽²⁶⁾ 前掲『戸田城聖全集・第3巻』、417-418頁。

⁽²⁷⁾ 前掲「人間革命」牧田先生（四）には、創価教育と決まった後、続けて、「『巖君、原稿は書き散らして出来ているんだ、これを整理統一して綴り直さなければならないが、誰か文章の上手な者はあらんか』

述している。須藤とは、須藤一のこと。

彼も、次のように書いている。

大正十四年三月、母親に別れを告げ赴任したのが岩見沢尋常高等小学校、豪放な永井校長の下に武田先輩や、阿倍後輩の両面伯等と楽しく夢の様に過した三年、一念発起上京、戸田城外先生の時習学館に教鞭を執り、牧口先生にデュルケムや田辺博士の価値論の講義を聞き、又三谷素溪⁽²⁸⁾師の立正安国論の講義を聞き、創価教育学の編集と命名に協力し、日大に法律を学ぶ⁽²⁸⁾。(下線筆者)

須藤の上京は、1928(昭和3)年3月以降であるので、<表1>の2Aから2D、および、3A、また、当然だが、1927(昭和2)年以前の可能性はない。

第二の条件。「創価」という言葉の誕生は、「寒い季節」であったと戸田は証言している。

七回忌法要のあいさつでは、年月は述べていないが、季節には触れている。「忘れもいたしません。夜の十二時まで、二人で火鉢をかこんで、わたくしの家で、こんこんと学説の発表について語りあいました⁽²⁹⁾。」(下線筆者)とあり、火鉢をかこむ寒い季節に限定される。「人間革命」においても、「冬特有の冷たい風」「火もとぼしくなつた火鉢に手をかざして」という表現がでてくる⁽³⁰⁾。当然、各年のB、C(4月から9月)の可能性はない。

この2つから、<表1>で、太字で示した3D、4A、および、4D、5Aの4つの期間区分に絞られる。つまり、1928(昭和3)年10月から1929(昭和4)年3月か、1929(昭和4)年10月から1930(昭和5)年3月の寒い時期に絞られるということである。

ロ)『家庭教育学総論』と『推理式指導算術』

ここで、2つの問題提起をしておきたい。

問題提起の第一は、1929(昭和4)年12月と1930(昭和5)年6月に出版された戸田の著作において「創価」の記述に大きな違いがあるということである。

前者は、1929(昭和4)年12月1日に出版された戸田の第一著作、『家庭教育学総論―中等学校入学試験の話と愛児の優等化⁽³¹⁾』(以下、『家庭教育学総論』と略記)である。後者は、1930(昭和5)年6月25日に出版された第二著作、『推理式指導算術』(以下、『指導算術』と略記)である。

『先生の後輩では居りませんか』『うん、須藤君はどうかね、あれは札幌師範の後輩でもあるし君の経営の塾でも働いているし都合ではないか』『先生のお眼鏡にかなえば須藤君には私から話しましょう』師弟二人が希望に燃えて寒風の中に牧田先生を送り出したのは終電車に間に合うか合わないかの時間であった」とある。

⁽²⁸⁾ 前掲『五十年』、31頁。

⁽²⁹⁾ 前掲『戸田城聖全集・第3巻』、417頁。

⁽³⁰⁾ 「昭和五年の二月外には星も見えぬ雲の下を東京の冬特有の冷たい風が吹いていた。十二時を打つたのが五分程前である、ちよこなんと八畳の床の間を背にして火もとぼしくなつた火鉢に手をかざして六十と云うが年にも見えぬ若い顔で真向いに座っているのは、牧田先生である」(前掲「人間革命」「牧田先生(一)」)と記述。

⁽³¹⁾ 戸田城外著『家庭教育学総論 中等学校入学試験の話と愛児の優等化』(城文堂 1929年)は、『創価教育』第2号より3回に分け翻刻紹介しているので参照されたい。

この2つの著作には、「創価」という言葉の有無と牧口常三郎の関わり方などに次のような違いがある。

1. 「序」の執筆者について。

『家庭教育学総論』の「序」は、戸田が本科2年に在籍している中央大学の総長、馬場愿治⁽³²⁾が執筆。

『指導算術』の「序」は、牧口常三郎が執筆。

※ 戸田は、記念すべき第一著作の「序」をなぜ牧口に依頼しなかったのか。

2. 「創価」という言葉について。

『家庭教育学総論』には、「創価」という言葉はまったく出てこない。

『指導算術』には、『体系・第1巻』出版前にも関わらず、背表紙には「創価教育学原理による」と表示⁽³³⁾。牧口の「序」の肩書は「創価教育学大系著者としての立場にて」とあり、創価教育学樹立の動機について述べている⁽³⁴⁾。

3. 牧口常三郎に関する記述について。

『家庭教育学総論』では、本文中1カ所⁽³⁵⁾。

『指導算術』の本文は問題の系統的配列と解説であり、記述なし。

4. 発行所について。

『家庭教育学総論』は、城文堂⁽³⁶⁾。

『指導算術』初版は、創価教育学支援会。発売元に、城文堂出版部。

5. 重版について。

『家庭教育学総論』は、重版した形跡がない⁽³⁷⁾。1年後の1930（昭和5）年11月、戸田

⁽³²⁾ 『馬場愿治先生追慕録』（川面凡児先生十周年記念会 1941年）、189-195頁には、馬場の年譜が掲載されているので、略記する。「大正12年（64歳）九月 中央大学学長事務取扱に就任した。同15年（67歳）二月に中央大学学長に就任し、又同大学に於て法学部教授を兼ねた。昭和5年（71歳）中央大学学長を辞任し、五月中央大学顧問となり逝去の際に迄及んだ。同15年（81歳）自邸にて11月13日薨去した。」戸田は、1925（大正14）年4月に中央大学予科に入学し、予科卒業後、1928（昭和3）年4月に経済学部に入學し、1930（昭和5）年3月迄在籍した。

⁽³³⁾ 表紙、中表紙、奥付には、「創価教育学原理による」とは書かれていない。後述。

⁽³⁴⁾ 「如何に教師の手腕を信頼するに足るとしても、よき材料とよき指導法を提供する良書なきときは、武器を失へる戦士に等しい。多年教学教育の欠陥を培へる原因は、かゝる良書の存在せざるに因る所大である。これ余が創価教育学樹立の動機となり、然も其の内容の重要な一部を占むるものである。」『指導算術』（城文堂 1930年）、「序」の2頁。

⁽³⁵⁾ 牧口について触れているのは、「第六章 家庭教育で児童を優等化する方法」の「四 学習上の欠陥補給方法」の「C 綴方科」である。「今此処に申し上げる方法は、牧口常三郎先生の応用教育学の一部門で、私共は文型主義と名づけて居る教授法で、私が此処で始めて社会的に発表するもので御座います。其の原理原則については、早晚先生の手によつて詳細に発表されることと信じて居りますので、私は只其の实地教授の方⁽³⁷⁾についてのみ申し述べます」（181頁）とある。

⁽³⁶⁾ 『帝国信用録（第27版）』（帝国興信所 1934年）、70頁では、開業を「昭和5年」と記している。

⁽³⁷⁾ 戸田城外著『中・女学校試験地獄の解剖』（日本小学館 1933年）は、『家庭教育学総論』とは頁数は異なるが、その改題・改訂した著作ではないかと考える。『推理式読方指導 第五学年用（再版）』（城文堂 1933年）の巻末広告で引用されている同書の「序」の部分は、『家庭教育学総論』の「序」と同じである。

が編輯兼発行した『環境』第1巻第9号（以下『環境』第9号と略記）において、全く触れられていない。最近までその存在自体も知られていなかった。現存する1冊⁽³⁸⁾は初版。

『指導算術』は、初版出版以来版を重ね、普及版も出版された。百万部のロング・セラーになったという⁽³⁹⁾。

1929（昭和4）年12月出版の『家庭教育学総論』では、「創価」について全く触れていないのに対し、1930（昭和5）年6月出版の『指導算術』では、「創価教育学支援会」が発行し、牧口が「序」を執筆、その中で創価教育学樹立の動機を述べている。この違いは、この7カ月間に、牧口と戸田に、また、『体系』出版に向けて何か大きな変化があったからではないか。しかし、考えられる可能性は2つある。

第一の可能性。「創価」という言葉がこの7カ月の間に生まれ、『体系』出版に向けて2人が大きく動き始めた。

第二の可能性。この期間以前に、「創価」という言葉が生まれたが、2人は、その公表を「創価教育学支援会」が結成されるまで控えていた。

しかし、『家庭教育学総論』についての最大の疑問は、戸田の第一著作でありながら、『環境』第9号の記事・広告、それ以降の戸田著作の巻末広告に全く出てこないことである。

ハ)『家庭教育学総論』と『小学校長登用試験制度論』

問題提起の第二は、1929（昭和4）年12月出版の『家庭教育学総論』には、「創価」という言葉が出てこないにもかかわらず、同年9月出版とされる『制度論』には、「創価」という言葉が出てくるということである。

牧口は、「小学校長登用試験制度」の実現に以前から深い関心をもっていた。すでに、1921（大

『中・女学校試験地獄の解剖』は、東京朝日新聞調査部『読書標』第80号（東京朝日新聞社 1933年8月）、2頁に掲載されているので、同年8月頃の出版。未見。

⁽³⁸⁾ 財団法人三康文化研究所附属三康図書館所蔵。印刷所および戸田が、図書の出版に慣れていなかったのか、もしくは、戸田が出版を急いだためか、『家庭教育学総論』は、誤植が目立つ。

⁽³⁹⁾ 戸田は、インタビューに応じて『指導算術』という中学受験参考書も作ったが、これは百万部売れたよと述べている（「戸田城聖という男」『週刊朝日』1956年7月29日号、朝日新聞社、15頁）。『大白蓮華』第152号（聖教新聞社、1964年1月、43頁）の「戸田先生の青年時代」には、『指導算術・戸田城外著』は、当時一世を風靡するの感あり、発行部数は百万に達したといわれているとある。1939年12月下旬の創価教育学会の発会式で牧口とはじめて会い、その後、時習学館時習部長であった神尾武雄は、「大正十五年に出版した戸田の著『推理式指導算術』が、二百何十版かを重ね、隠れたるベスト・セラーズ（当時はこの語はなかった）であったことでも証明されよう」（神尾武雄『信仰と文学に生きて』、第三文明社、1981年、137頁）と述べているが、城文堂から初版が出版されたのは1930年である。現在確認できる版は126版までで、普及版を合わせても二百何十版には届かない。また、西野辰吉は、『推理式指導算術』は、売れゆきがよく、版をかさねて、四、五年で百万部をこえるベストセラーの一冊になっていた（『伝記 戸田城聖』、第三文明社、1985年、116頁）と述べているが、「四、五年」では、版の推移から考えて百万部は疑問。拙稿『『推理式指導算術』研究資料（修正版）』『創価教育』第1号（創価教育研究所 2008年）、195頁参照。私は、12年間で126版+若干の重版と普及版15版+若干の重版を合わせて、百万部に達したのではないかと考えている。

正10)年にはその発言がある⁽⁴⁰⁾。そのため、牧口が、1929(昭和4)年9月5日に『制度論』を発表しても全く違和感はないが、その冒頭に「これは私が近く発表せんとする創価教育学の実際的研究中の一節である⁽⁴¹⁾」とあって、「近く発表せんとする創価教育学」と述べているのに、3カ月後の12月1日に出版された『家庭教育学総論』には、「創価」という言葉が全く出てこない。これは、なぜかという疑問が湧く。

同書は、戸田の著書だから出てこないという考え方も当然あるだろう。しかし、1929(昭和4)年初頭に「創価」という言葉が生まれ、牧口も『制度論』で「近く発表せんとする」と述べ、戸田も当然原稿整理に入っているとすれば、「其(牧口先生の教育学)の原理原則については、早晚先生の手によつて詳細に発表されることと信じて居りますので、私は只其の实地教授の方についてのみ申し述べます⁽⁴²⁾」(下線筆者)の下線部分は、「早晚先生の手によつて詳細に発表されることと思います」というような表現になるのではないか。

続いて出てくる疑問は、1929(昭和4)年初頭から、牧口、戸田一体となって『体系』出版という大事業に取り組んでいたとするならば、『家庭教育学総論』に牧口と戸田との一体感が全く感じられないのはなぜかということである。牧口の提案で、中央大学総長の馬場愿治に「序」を依頼したのだとしても、「自序」で牧口の教育学について触れてもよいはずである。

最後の疑問は、もしかしたら『家庭教育学総論』は戸田の時習学館における実践に基づいた父母への啓蒙書ではあるが、厳密に言えば、創価教育学原理によるものではないのではないかということである。そのため、後に戸田は深慮し、同書の増刷をしなかったのではないか。出版社の「城文堂」も、「城外」の「城」の字からと考えられるが、1934(昭和9)年には、その社名を「日本小学館」と改めている⁽⁴³⁾。

『家庭教育学総論』は、1929(昭和4)年12月には、まだ「創価」という言葉は生まれておらず、『体系』出版へ2人の歯車はまだ回転を始めていないことを示しているのではないか。私が、1929(昭和4)年説に強く疑問を持つようになった最大の理由は、この『家庭教育学総論』の存在である。

2. 『創価教育学体系・第1巻』出版以前

a. 『体系』の構想の形成過程

以上の問題提起を踏まえた上で、後に『創価教育学体系』として結実する牧口の教育論の構想

⁽⁴⁰⁾ 佐藤柏葉「東京市の小学校を視る(二)」『北海道教育』第35号(北海道聯合教育会 1921年)、42頁に、「話が『教師論』に及んだ時、(牧口)先生の眼が輝き、そして語調にも頓に力が加はつた。『学校長を試験によつて採用するといふ制度を設けたらどうだらうと思つてゐる。形式だと言ふかも知れんが、この登用令によつて青年教育者をどれだけ発奮させるか知れない。さうでないと、人才が可哀さうだ。(以下略)』とあり、牧口が、「小学校長登用試験制度」に強い関心を持っていたことがわかる。

⁽⁴¹⁾ 『小学校校長試験制度論』の表紙裏の冒頭の1行にある。表紙裏は、4行の文と目次。

⁽⁴²⁾ 前掲『家庭教育学総論 中等学校入学試験の話と愛児の優等化』、181頁。

⁽⁴³⁾ 帝国興信所編『帝国銀行会社要録(第28版)』(帝国興信所 1940年)、440頁では、日本小学館の創立を昭和9年10月と記しているが、昭和9年4月15日発行の『新教材集録』第4巻第4号は、すでに「日本小学館」発行となっている(第4巻第3号以前は未見)。

がいつ頃から形成されてきたのかをここで俯瞰しておきたい。1924（大正13）年11月19日の『東京朝日新聞』には、「今までの教育学は学者の教育学で哲学的の研究に偏した傾向がある、之を教育現象から帰納したもの則ち科学的の教育学を完成したいと思つて居ます」（下線筆者）という牧口の発言が紹介されている⁽⁴⁴⁾。

牧口は、1893（明治26）年、母校北海道師範学校の附属小学校の教壇に立った頃から、思索したことを書きとめて残してきた⁽⁴⁵⁾。しかし、彼の教育学形成の上で特に重要だと思われるのは、大正小学校の校長時代からの10年である⁽⁴⁶⁾。1930（昭和5）年11月発行の『環境』第9号で、東山子⁽⁴⁷⁾は、『人生地理学』、『教授の統合中心としての郷土科研究』、『地理教授の方法及内容の研究』について触れた後、次のように書いている⁽⁴⁸⁾。

東京市大正尋常小学校長時代には部下の新進と共に、大正五年より三年間に亘りて地理⁽⁴⁹⁾、書方⁽⁵⁰⁾、綴方教授⁽⁵¹⁾の実験的研究を公開し教育實際家は固より専門諸大家の批評を需めた。これに対し、当時氏の地理教授を参観した故澤柳文学博士は「過去十数年間に斯の如き会心の地理教授を見た事がない。」と讃嘆した。（中略）而して最近は過去十年間に於ける思索実験の所産たる「創価教育学体系」の完成につとめ、遂にこれを十二巻に纏めて我全思想界におくる事となった。（下線筆者）

(44) 『東京朝日新聞』（朝日新聞社 1924年11月19日）、6面の連載コラム「校長先生」の「芝白金校の牧口常三郎氏」。

(45) 『体系・第1巻』の「緒言」、4頁には、「学の名を冠すとはいへ、余は最初から一科の学を云為しようと企図したものではない。日常の職務遂行の必要上から反省し思索したメモリーの堆積に過ぎない。守銭奴が一文二文を惜んで溜める僻の様に、余も又日常生活の間に往來する思想の涓滴の散逸を恐れて、書き採つて置いたのが、教育生活に入つて以来三十余年にも亘つたために、いつの間にか積り積つて反古紙の山を築いてしまった」（下線筆者）とある。

(46) 三笠小学校長の肩書で書いた「文章範型応用主義の綴方教授」（全集未掲載）『教育界』第20巻第9号（明治教育社 1921年）、69頁には、「私は幸か不幸か、東京市就職以来四つの学校を経巡つて其の都度かゝる方面の継続的研究が中断されるのには閉口したのであるが」とある。「かゝる方面」とは、一応は綴方教授のことであろうが、もっと広い意味とも考えられる。本稿では引用を除き、「尋常小学校」を「小学校」と略記した。

(47) 前掲『環境』第9号の奥付の上段の「編輯余録」も、東山子が書いている。編輯兼発行人は戸田雅皓（戸田のペンネームのひとつ）。「編輯余録」は、一人が書いており、東山子は、編輯兼発行人の戸田雅皓と考えられる。

(48) 東山子「牧口氏の人格と其研究」『環境』第9号（城文堂 1930年）、17頁。

(49) 大正小学校長時代に、地理教授について述べたものとして、「小学校郷土問題の解決に一部の尽力を望む」（全集未掲載）『教育界』第16巻第3号（明治教育社 1917年）、31頁がある。

(50) 前掲『教育界』第20巻第9号（明治教育社 1921年）、69頁では、1919年の大正小学校の記念日に綴方教授の研究會を開いたことに触れている。解題及び翻刻は、山口徹『『牧口常三郎研究ノート』新蒐集文献の覚え書き（その1）』『創価教育研究』第2号（創価教育研究センター 2003年）、231-234、245-247頁参照。

(51) 一記者「東京市大正尋常小学校に於ける書方教授の研究」『教育界』第18巻第2号（明治教育社 1918年）、36-40頁に、開校2周年記念の書方教授研究會の報告があり、その中に牧口校長の講演大略が収録されている（全集未掲載）。

牧口は、大正小学校長時代より教育学の研究につとめ⁽⁵²⁾、特にこの十年は、教育現場での経験を踏まえた自身の教育学の出版をしたいと願っていた。しかし、日々の校長としての職務は大変に多忙であり、その実現が困難な状況が続いていた⁽⁵³⁾。そのような中であっても、後に『創価教育学体系』として結実する全体の構想を1928(昭和3)年後半には形成していた。なぜなら、『体系・第1巻』で「惜いかな前論が創価教育学組織の略ぼ形成後に紹介されたもので、具さにこれに照して今は更新するの違はないが⁽⁵⁴⁾」(下線筆者)と述べているからである。前論とは、1929(昭和4)年1月に発表された横山栄次の論文「教育教授研究法の一転機⁽⁵⁵⁾」のことである。1929(昭和4)年1月には「略ぼ形成後」とあるので、1928(昭和3)年後半以降であれば、二人の語らいから「創価」という言葉が生まれる可能性はある。

b. 1929(昭和4)年から1930(昭和5)年の著作における「創価」の記述

牧口が白金小学校に赴任した1922(大正11)年から1930(昭和5)年までの牧口の著作と論文は、以下の通りである。なお、1922(大正11)年から1928(昭和3)年までに著した著作・論文はないと思われる⁽⁵⁶⁾。

次に、その著作と論文において「創価」という言葉が使われているかどうかをまとめてみた。

<著作>

- 1 『小学校長登用試験制度論』編輯兼発行戸田城外、昭和4年9月8日、活字印刷
著者の肩書は、白金尋常小学校長、表紙裏冒頭の一行に「創価」が出てくる。
- 2 『創価教育学大系概論』創価教育学支援会、出版年月日不明、孔版印刷
「創価」の文字は、タイトルのほかに論文中に、5カ所出てくる。

<雑誌掲載の論文>

- 1 「教育学の科学体系に於ける位置」『教育週報』第280号、教育週報社
昭和5年9月27日発行
著者名のみ。肩書は未記載。論文中に、「創価」は出てこない。 ※牧口全集未掲載
- 2 「教育学の目的」『神奈川県教育』第269号、神奈川県教育会 昭和5年10月1日発行
著者の肩書「創価教育大系著者」。論文中に、「創価」は出てこない。
※牧口全集未掲載
- 3 「説明科学と規範科学」『教育時論』第1637号、開発社 昭和5年12月5日発行

⁽⁵²⁾ 拙稿「創価教育の80年—その言葉の誕生と学校設立の構想—」『創価教育』第4号(創価教育研究所 2011年)、238—256頁参照。

⁽⁵³⁾ 『体系・第1巻』の「緒言」、5頁には、「さて日々公私の多忙に整理のしようもない。(中略)斯くて粗書半感の原稿を眺むること既に二十有余年にも及んで居る」と述べている。

⁽⁵⁴⁾ 『牧口常三郎全集・第5巻』(第三文明社 1982年)、87頁。

⁽⁵⁵⁾ 横山栄次「教育教授研究法の一転機」『教育研究』337号(初等教育研究会 1929年1月)、23—26頁。横山は、牧口が北海道師範学校を退職した時の校長。

⁽⁵⁶⁾ 三笠小学校長の肩書で書いた前掲「文章範型応用主義の綴方教授」(1921年)以降、1928(昭和3)年まで牧口は論文を発表していない。もしくは、未発見。職務多忙のためか。

著者名のみ⁽⁵⁷⁾。肩書は未記載。論文中に、「創価」は4カ所出てくる。

※なお、1931（昭和6）年4月号に掲載された『長崎教育』第428号の論文「教育学の不信原因と対策」（牧口全集未掲載）の著者の肩書も「創価教育学大系著者」である。

まず、白金小学校の校長就任以降、『制度論』（1929年）と『大系概論』（作成年不明）を除くと、1930（昭和5）年夏以降、牧口の論文発表が活発になっていることに気がつく。この頃から、『体系』出版を前に牧口の周辺に変化が起こっている。

1の『教育週報』の論文では、「創価」という言葉を一切使っていない⁽⁵⁸⁾。著者名のみで、肩書きも「創価教育学大系著者」ではない。同紙は、『体系』の発刊に対して極めて好意的な記事を発表後も継続して掲載してくれた教育新聞⁽⁵⁹⁾である。牧口の『体系』出版に理解を示し、応援していた。

2の『神奈川教育』の論文では、体系出版まで2カ月を切っているが、著者の肩書は「大系著者」のみである。

3の『教育時論』の論文では、「創価作用」が1回、「創価活動」が2回、「創価目的」が1回出てくるが「創価教育」という言葉は出てこない。

次に、1930（昭和5）年の戸田の著作に目を転じると、同年6月に出版された戸田城外著『指導算術』の初版は未見であるが、初版の広告⁽⁶⁰⁾から、「創価教育学支援会」発行であり、背表紙には「創価教育学原理による」とあったと考えられる。しかし、「創価教育学原理による」という言葉は、表紙、中表紙、奥付にはなく、「推理式指導算術」のみであるため、それが書名になっている。背表紙のこの言葉は、本文を校了した印刷直前の段階で、書名に影響せず、購入者の目に留まりやすい背表紙のみに入れた可能性が考えられる。

また、第11版には、牧口が書いた「序」が掲載されているので、初版の「序」も牧口であろうが、その肩書きが、第11版と同じく「創価教育学大系著者の立場として⁽⁶¹⁾」であるかどうかは不明である。しかし、背表紙は「創価教育学原理による」と加えていることから、当然その説明が必要であり、初版における牧口の肩書は、「白金尋常小学校長」ではなく、「創価教育学（大系）著者」の方がふさわしい。そのために、戸田が『指導算術』の出版時期を延期した可能性も考えられないことではない。

⁽⁵⁷⁾ 著者名が、「牧野常三郎」となっている。

⁽⁵⁸⁾ 論文の最後の段落は、以下の通り。「純正科学の確定された小数の真理を多数の環境に活用して、多くの価値を創造⁽⁵⁷⁾とすることこそ応用科学の期する所で、純正科学の確認したる真理には順応するが純正科学者の思ひも及ばない新発見があり、これ即ち新しい価値を創造したのであるからである。応用科学は純正科学から抽出された。「価値を創造」とあっても、「創価」という言葉は出てこない。

⁽⁵⁹⁾ 拙稿「牧口常三郎出席の『教育週報』『教育の合理化』研究座談会」『創価教育』第3号（創価教育研究所 2010年）、198-202頁の解題を参照。

⁽⁶⁰⁾ 『教育週報』第268号（教育週報社 1930年7月5日）、7面の『指導算術』広告。

⁽⁶¹⁾ 『戸田城聖全集・第5巻』（和光社 1966年）および『戸田城聖全集・第9巻』（聖教新聞社 1990年）収録の『指導算術』の「序」の牧口の肩書は、「創価教育学体系著者の立場として」（下線筆者）となっている。なぜなら、共に元版は、1938（昭和13）年発行の改訂87版を使っているからである。体系著者となったのは、1933年の16版以降である（12-15版未見）。

牧口の教育雑誌等への論文発表が、1930（昭和5）年夏以降活発になったのは、教育の現場にいる小学校長による全12巻もの教育学体系出版の構想が編輯者に伝わり、原稿依頼があったと考えられる⁽⁶²⁾。そこで、なぜ『教育週報』、『教育時論』という全国規模の教育新聞・雑誌で、『体系・第1巻』の印刷にかかり始める頃に、「大系著者」もしくは「体系著者」という肩書を使わなかったのかという疑問が出てくる。まだ第1巻も出版されていないので「著者」とすべきでないという判断が働いたのか、もしくは、牧口の方で「大系」から「体系」へと書名の変更を考えていた時期にあたるのか、いずれかである。

3. 『創価教育学大系概論』

次に、作成年の不明な『創価教育学大系概論』と、出版年に疑義のある『小学校長登用制度論』について出版年の検討を行う。そのことにより、1 c. イ)の検討で次のように絞り込まれた「創価」という言葉の生れた時期を更に絞り込んでいきたい。

期間区分	期 間
3 D、4 A	1928（昭和3）年10月から1929（昭和4）年3月
4 D、5 A	1929（昭和4）年10月から1930（昭和5）年3月

a. 『大系概論』の作成年

1929（昭和4）年2月に「創価」という言葉が生まれたとする『年譜・牧口常三郎 戸田城聖』では、『創価教育学大系概論』（以下『大系概論』という）の作成時期を、1929（昭和4）年の最後の項目において、「月が不明で年や時期のみ確定している事項」としている。

一方、1930（昭和5）年2月に「創価」という言葉が生まれたとする『三代会長年譜 上巻』では、『大系概論』の作成時期を1930（昭和5）年4月の最後の項目において、「月が不明で年や時期のみ確定している事項」としている。

確かに、『大系概論』には奥付がないが、本文中に国民新聞社の「教育改造論」懸賞募集を「昨年」と記していることから⁽⁶³⁾、1930（昭和5）年に作成されたことは明らかである。このことは、既に1984年に斎藤正二によって指摘されているが⁽⁶⁴⁾、『年譜・牧口常三郎 戸田城聖』（1993年出版）には反映されなかった。

⁽⁶²⁾ 『神奈川県教育』第269号に掲載された論文「教育学の目的」の文末には、「往年『人生地理学』を著して地理科の革新を促し、其の後『郷土科』『地理教授法』も著はしたる牧口氏は目下は東京市白金尋常小学校長として数十年の研究の結果を総合して、創価教育学を近々発表せんとしつゝある由。（編者）」とある。

⁽⁶³⁾ 『大系概論』には、「昨年初め国民新聞社が『教育改造論』の懸賞論文を募集したのは」（下線筆者）（『牧口常三郎全集・第8巻』、第三文明社、1984年、180頁）とあるが、国民新聞編集局編『教育改造論』（啓成社 1930年）、凡例によると、「此の懸賞論文は、昭和四年一月二十四日の国民新聞紙上に募集の趣旨及規定を社告し、同年五月三十一日を以て之を締切り」とある。『大系概論』の「昨年」は、1929（昭和4）年を意味する。

⁽⁶⁴⁾ 前掲『牧口常三郎全集・第8巻』、222頁の補注。

b. 『大系概論』作成の目的

前述のように『大系概論』の作成年は、1930（昭和5）年である。当然、『体系』が出版された同年11月18日以降に、『大系概論』が作成されることはないので、同書は1930（昭和5）年1月から10月頃までに作成されたことになる。

次に、同書の作成の目的、時期等について検討をすすめたい。同書には、以下の特徴が認められる。

1. 奥付がない。
2. 本文36ページの孔版（ガリ版）印刷の小冊子である。
3. 『指導算術』初版と同じ、「創価教育学支援会」発行である。
4. 『創価教育学体系概論』ではなく、『創価教育学大系概論』である。
5. 表紙は「創価教育学大系概論」となっているが、1ページ目の冒頭は、「創価教育学概論」である。
6. 牧口は、『大系概論』書名中の「創価教育学大系」の著者という肩書で、『指導算術』の「序」や論文の寄稿を行っている。『体系』発刊後にも、「大系著者」の肩書きで書かれた論文がある。
7. 表紙裏に、日蓮が引用している3つの文言が書かれている。
8. 「創価」という言葉は、タイトルだけでなく、本文中にも5カ所出てくる。

まず、1. 奥付がないことについて。

1893（明治26）年に施行された「出版法⁽⁶⁵⁾」では、

第1条 凡ソ機械舎密其ノ他何等ノ方法ヲ以テスルヲ問ハス文書図画ヲ印刷シテ之ヲ発売シ又ハ頒布スルヲ出版ト云ヒ（以下略）

第7条 文書図書ノ発行者ハ其ノ氏名、住所及発行の年月日ヲ其ノ文書図画ノ末尾ニ記載スヘシ（以下略）

第8条 文書図書ノ印刷者ハ其ノ氏名、住所及印刷ノ年月日ヲ其ノ文書図画ノ末尾ニ記載シ（以下略）

と定められている。当時、いかなる方法で作成された印刷物も、販売、頒布をするものを出版といい、そのためには、発行者と印刷者の氏名を文書図画ノ末尾（奥付）に明示し、事前に届け出ることが義務づけられていた。

『大系概論』に奥付がないということは、出版法の定める出版物ではない。そのため、『大系概論』は、販売および頒布することはできない。

2. 孔版印刷について。

『大系概論』は、本文36ページの孔版（ガリ版）印刷の小冊子である。奥付がなく、出版法に

⁽⁶⁵⁾ 末川博編『六法全書 事項索引及参照例文附』（岩波書店 1930年）、117-118頁。

より頒布もできない。それでは、牧口が『大系概論』を著した主たる目的はなにか。それは、牧口の頭の中にしかない創価教育学の全体構造を、整理者も共有し、彼の意図に沿った原稿整理を行うために作成したと考えるのが妥当ではないだろうか。

今まで述べたようにその整理者は、二人いた。七回忌法要の戸田のあいさつでは、「以来、幾多の変遷をして、印刷にとりかかりましたが、思うようにできず、先生もひじょうにお苦しみになりました」と、漠然と述べているが、「人間革命」ではより詳しく、その整理を「創価」という言葉が誕生した1930（昭和5）年2月から須藤一が始め⁽⁶⁶⁾、3カ月たって出来上がった原稿が牧口の意を満たすものではなかったもので、改めて戸田が行うことになったと書いている⁽⁶⁷⁾。

では、整理を始めるにあたり、須藤と戸田は『大系概論』を手にすることは可能だったのだろうか。「創価」という言葉の誕生を1929（昭和4）年とした場合には、須藤も戸田も、『大系概論』を手にして整理を始めることはできない。なぜなら、『大系概論』は、1930（昭和5）年の作成であるからである。

それでは、1930（昭和5）年とした場合はどうだろうか。最初に、須藤の場合はどうか。2 a. で述べたように1928（昭和3）年後半には、牧口の中にその教育学の構想は出来上がり、場合によっては、下書きにあたるものも作成途中である可能性もあるので、『大系概論』の作成にはそれほど時間はかからない。また、「創価」という言葉も誕生している。しかし、須藤が『大系概論』を手にするためには、同年2月頃に、「創価教育学支援会」が、言葉上だけでも生まれていなければならない。次に、戸田の場合には、「創価」という言葉の誕生から3カ月経過しているので、その頃には「創価教育学支援会」が誕生していてもおかしくない。なぜなら、同年6月には「創価教育学支援会」から『指導算術』が出版されているからである。

現存する『大系概論』は、牧口家から特高警察に押収され、後に返却されたもので、表紙に「定本」と書かれた一冊のみである。そこには牧口が修正した書き込みがある。『環境』第9号掲載の「創価教育学緒論」では、その部分は牧口の修正に従い記されている⁽⁶⁸⁾。

同緒論は、2ページ目以降は、「編者記」（＝戸田）となっており、その部分は、厳密には牧口の著作とはいえない。そう考えると、『大系概論』は、牧口が『体系』出版前に、その全体構想をまとめた現存する唯一のものといえる。また、『体系』出版を前に、牧口が目指した教育学の全体像を描いた最初のラフ・スケッチと言える文献ではないだろうか。『大系概論』の目的が、原稿作成のガイドラインであるならば、遅くとも須藤が整理を始めてから3カ月後、戸田が整理を始める1930（昭和5）年4月から5月までには完成していなければならない。

⁽⁶⁶⁾ 前掲「人間革命」「人の心（一）」『聖教新聞』第40号（聖教新聞社 1952年6月1日）、1面。

⁽⁶⁷⁾ 前掲「人間革命」「人の心（二）」『聖教新聞』第41号（聖教新聞社 1952年6月10日）、1面。戸田が原稿の整理に取り組むことになった経緯は、七回忌法要でも同様に述べている。

⁽⁶⁸⁾ 牧口は、『体系概論』の元版の「人間に実在を創造する力はない。創造し得るものは価値のみである」（1頁）の「実在」を「物質」に訂正している。「創価教育学緒論」では、その部分を「人間には物質を創造する力はない。吾々が創造し得るものは価値のみである」（『環境』第9号、22頁）としている。『牧口常三郎全集・第8巻』（第三文明社 1984年）の『大系概論』では、牧口の訂正に基づき、「人間に物質を創造する力はない。創造し得るものは価値のみである」（161頁）（下線筆者）と記している。

また、牧口と原稿作成者との情報共有だけが目的であれば、カーボン複写でも用が足りる。『大系概論』を孔版印刷にしたのは、全12巻にも及ぶ大出版事業の趣旨を、次項で述べる「創価教育学支援会」の主な会員や出版を担う富山房の生沼大造などに説明をすることも考慮したのではないか。そのように考えると、正副2枚のカーボン複写ではなく、孔版で少部数印刷するのは適切な方法といえる。

3. 「創価教育学支援会」について。

創価教育学支援会の誕生について『体系・第1巻』の「緒言⁽⁶⁹⁾」では、

偶々同志の青年諸君が自分の事の如く心配し、この事業の為め後援会を設けて精神的の援助をなし

とある。

また、『教育週報』の牧口を紹介するコラムにも、同趣旨の記述がある。

君はよく後進の長所を認めて之を引上げる。従つて後進もその情誼に感じて君に尽す事を忘れぬ。『創価教育学支援会』の如きその現れの一つである。希くは、君をしてその望む所を存分に遂行させたいと思ふ⁽⁷⁰⁾。

「同志の青年諸君が（中略）この事業の為め後援会を設けて」とあるように、支援会は牧口が引き上げてきた後進の青年たちによってつくられたが、支援会誕生のもうひとつの母体となったのは白金小学校の児童やその卒業生の父母たちであった⁽⁷¹⁾。戸田も、「人間革命」で、『体系』出版を喜んでくれた人々として、大正小学校時代の訓導であった前田偉男と大竹新、白金小学校の父母をあげている⁽⁷²⁾。

⁽⁶⁹⁾ 『牧口常三郎全集・第5巻』（第三文明社 1982年）、8頁。

⁽⁷⁰⁾ 「人物の片影（303）創価教育学の東京市白金小学校長 牧口常三郎君」『教育週報』第303号（教育週報社 1931年3月7日）、4面。後に「人物の片影」をまとめた為藤五郎編『現代教育家評伝』（文化書房 1936年）が出版される。「序に代へて」で、為藤は、「本書掲載の中、約半数位は、私自身の執筆したものであるが、他は『教育週報』の編輯に従事する記者数人の手に成つたものである」と述べている。このコラムは為藤によるものではないかと考えられる。

⁽⁷¹⁾ 1976（昭和51）年9月27日に行われた渡辺力氏に対する取材で、渡辺は「支援会ができたのは、教育学説ができたより早い。父兄の人たちのなかから、真しな牧口先生を応援しよう、支援しようというふうになった」と述べている。「教育学説ができた」とは、体系出版のことか。

⁽⁷²⁾ 前掲「人間革命」「人の心（三）」（『聖教新聞』第42号、1952年6月20日）、1面には、「涙ぐましいような師弟の結びつきと美しき友情とのおかげで教育学体系第一巻が出版されたのは昭和五年十一月であった、牧田門下生はふるい立つて喜んだ。又牧田先生を白金小学校から出すまいとしている数百人の保護者も非常に喜んでほめ讃えた。かげの力であつた巖さんは誰一人ほめもしなかつたが一人ニヤニヤとして居た。特に喜んだのは札幌師範時代の教え子で日本大学の社会学の講師をして居られたデユケエム学派の田辺寿利さんと、牧田先生の仲人で生沼大⁽⁷²⁾ 巖⁽⁷²⁾さんの長女の結婚した少年審判所の判事の前田さんと又前田さんと昔同じ大正小学校で先生の教を受けて今歯医者をしている大竹さんとであった」とある。前田偉男については、前掲山口徹『『牧口常三郎研究ノート』新蒐集文献の覚え書き（その1）』、231-244頁参照。

「創価教育学支援会」発行となっている書籍は、もう一冊ある。それは、1930（昭和5）年6月25日出版の『指導算術』である。同書には、当然だが、出版法に基づく奥付がある。同書は、1933（昭和8）年の16版までは「創価教育学支援会」の発行であるが、それ以降は「日本小学館」の発行に変わる⁽⁷³⁾。

出版法第6条では、「文書図画ノ発行者ハ文書図画ノ販売ヲ以テ営業トスル者ニ限ル（以下略）」とある。戸田は、先に述べた支援の広がりの中で、牧口の教育学の発行所として、まず「創価教育学支援会」という名称を考え、支援会発行の出版物の第1冊目として『指導算術』を発行した。

支援会は牧口・戸田の周りの人々から始まり、有力者・著名人にまで広がり、「政友会総裁 犬養毅」を筆頭とする28名の著名人が名を連ねた「創価教育学支援会」の形になっていく⁽⁷⁴⁾。そこには、牧口を白金小学校から追い出し、退職させようとする東京市教育局の策謀に対抗する、戸田や白金小学校の父兄の動きがあったと考えられる⁽⁷⁵⁾。

4. 『創価教育学大系概論』という書名について。

『大系概論』は、牧口の創価教育学の書名が最初は「創価教育学大系」と考えられていたことを示している。それもある程度長い間であり、『体系』出版の直前までも考えられる。

それは、1930（昭和5）年6月に出版された『指導算術』の「序」における牧口の肩書が、「大系著者」となっていることから明らかである。『指導算術』の「序」では、「創価教育学大系著者としての立場にて」として、創価教育学樹立の動機についても述べている。しかし、ここでいう「大系」は、孔版の『大系概論』を指すのではなく、牧口の構想した「創価教育学」の大系（体系）全体を指すのではないか。孔版でわずか本文36ページ、出版物として認められていない著作の著者では、肩書には相応しくない。『大系概論』作成の段階では、「創価教育学大系・全12巻」の構想であったのである。

その後、『体系・第1巻』の出版前に、2つの大きな変化があった。第一は、「大系」から「体系」に書名が変わったこと。第二は、発行所が『指導算術』では、「創価教育学支援会」であったが、『体系・第1巻』では、「創価教育学会」になったことである。それでは、なぜ、いつ頃、「創価教育学会」と命名したのか。書名の変更と発行所の変更が行われたのは、1930（昭和5）年のおよそ7月から10月までの、わずか4カ月に満たない期間内である⁽⁷⁶⁾。この二つの変更は、実は同時であり、牧口の日蓮仏法に対する確信と深まりによる内面的変化（受動的から能動的）と

⁽⁷³⁾ 前掲『「推理式指導算術」研究資料（修正版）』『創価教育』第1号、195頁参照。

⁽⁷⁴⁾ 前掲『環境』第9号、30-31頁。

⁽⁷⁵⁾ 「人間革命」には、体系出版を喜ぶ父兄の様子が、「牧田先生を白金小学校から出すまいとしている数百人の保護者も非常に喜んでほめ讃えた」と描かれている（注72参照）。後日になるが、『東京朝日新聞』第19448号、（朝日新聞社 1931年4月15日）、11面には、「篤学校長の転任で問題 白金校の父兄市の措置に憤慨」という記事が出ている。

⁽⁷⁶⁾ 2 b. の最後で触れた『教育週報』、『教育時論』においては、牧口の肩書が記載されていないこと、また、『神奈川県教育』、『長崎教育』においては、「大系著者」の肩書が掲載されていることをどう見るかは今後の検討課題である。後者の2誌は月刊に対し、前者は、週刊、旬刊（月3回）で入稿から印刷までの期間は短い。

も関係しているのかもしれない⁽⁷⁷⁾。「創価教育学支援会」は、「創価教育学」の出版とそれに基づく活動をあくまで支援する会である。「創価教育学会」となった時、それは、「創価教育学」に基づき実践・研究する会に変わる。受動的な団体から能動的な団体に変わる。現在、学会というと学者の集まりを想像するが、牧口にとって、また、当時の「学会」という言葉の持つ意味は現在と異なっているのかもしれないことに留意しておきたい⁽⁷⁸⁾。牧口にとって最も思い出の深い学

⁽⁷⁷⁾ 牧口自身は、信仰に対する確信と深まりを、1935（昭和10）年頃に書かれた『創価教育学体系梗概』（『牧口常三郎全集・第8巻』、第三文明社、1984年、405-406頁）では、2段階で述べている。以下の段階は、著者がさらに分けたものである。まず、

第一段階「創価教育学体系の研究が次第に熟し、將に第一巻も発表せんとした頃、不思議の因縁から法華經の研究に志し」

（時間経過）「そして進み行く間に」

第二段階「余が宗教観に一大変革を來した」

というのである。

その後段では、それをもっと詳しく、

第一段階「ところが法華經に逢ひ奉るに至つては、吾々の日常生活の基礎をなす科学、哲学の原理にして何等の矛盾がないこと、今まで教はつた宗教道徳とは全く異なるに驚き、心が動き初めた矢先き、生活上に不思議なる現象が数種現はれ、それが悉く法華經の文証に合致してゐるのには驚嘆の外なかつた」（下線筆者、以下同じ）

（時間経過）「そこで一大決心を以て愈々信仰に入つて見ると」、

第二段階「『天晴れぬれば地明かなり、法華を知るものは世法を得べき乎』との日蓮大聖人の仰が、私の生活中になる程と肯かれることとなり、言語に絶する歡喜を以て殆ど六十年の生活法を一新するに至つた」

というのである。

次の段は、牧口の中の内面的変化を具体的に述べている。

- ① 暗中摸索の不安が一掃され
- ② 生來の引込思案がなくなり
- ③ 生活目的が愈々遠大となり
- ④ 畏れることが少くなり
- ⑤ 國家教育の改造を一日も早く行はせなければならぬといふやうな大胆なる念願を禁ずる能はざるに至つた

これらは、「生活上に不思議なる現象が数種現はれ」のことではないか。

そして、「蓋し」以下が、「私の生活中になる程と肯かれること」ではないか。つまり、「蓋し『彼れが為に悪を除くは彼が親なり』てふ最大の慈悲を、最高の正直によつて生活する法華經の精神に遵ふならば」が、牧口の言う「一大決心」、經文の言葉で言えば、自らの中の「悪を除く」行為を行ったということである。

次の「『諸天善神は昼夜に常に法の為の故に之を衛護し給ふ』との經文が聊かながらも、研究と体験とによつて証明されたやうであるからである」が、「私の生活中になる程と肯かれること」であり、具体的には、自身の学説の出版が多くの人々＝諸天善神の力を得て、短期間で実を結んだということではないだろうか。

⁽⁷⁸⁾ 牧口の考えたのは、「創価教育」の学会なのか、「創価教育学」の会なのか、これは、一見小さなことに見えるが、今後の大事な研究課題ではなからうか。前者であれば、「創価教育」を研究していくことに主眼があり、後者であれば、「創価教育学」に基づく実践に重きを置くことになる。さらに、戸田により1946（昭和21）年3月に「創価教育学会」から改称された「創価学会」という言葉に対しても、同じ問いかけを發することができる。つまり、「創価」の学会なのか、「創価学」の会なのかということである。戸田にとって、それは、後者ではないかと考える。戸田が、「創価学」について触れた文献はないが、彼が

会は、1905（明治38）年5月、自らが創立した「大日本高等女学会⁽⁷⁹⁾」であった。これは、女性が、いつでも、どこでも、だれでも、教養を学ぶことが出来る学校として構想された。また、1930（昭和5）年当時、文検を受験する人々や、現場の訓導のために各種月刊雑誌を発行する「日本教育学会⁽⁸⁰⁾」が存在した。そのような当時の「学会」という言葉のとらえ方を十分考慮の上で、「創価教育学会」が何を目指して創立されたものなのか、考えてみる必要がある⁽⁸¹⁾。

七回忌法要のあいさつや「人間革命」からは、「創価」という言葉が生まれた牧口と戸田の語りの中では、全12巻の構想も、出版する本のタイトルも決まっていなかったようである。いつ頃から「大系」として構想し、さらに、いつ頃から「体系」と考えたのか。これが明らかになれば、『大系概論』の作成時期はさらに絞り込まれる。『大系概論』を著した目的が前述の通りであるならば、作成の時期は、1930（昭和5）年2月から5月までということになる。

5. 表紙と本文冒頭の書名の不統一について。

表紙と本文冒頭の書名が不統一なのは、「創価教育学」の概論として本文が作成された後に、「創価教育学大系」というタイトルを考えたからではないか。また、出版物ではなく、言わば関係者のみの資料なので、そのまま本文を作り直さずに表紙をつけて綴じたとも考えられる。

6. 「大系著者」の肩書について。

『指導算術』等で「大系著者」の肩書が使われているのは、「創価教育学大系」という書名は仮のものではなく、『体系』出版の直前まで、「大系」という書名で出版しようとしていたことを示している。

1930（昭和5）年の『体系・第1巻』出版までには、日本には教育（学）の「体系」、もしくは教授の「体系」というような、「体系」という言葉を使った教育学の出版物はない。教育の「大系」、教授の「大系」というような、「大系」という表現も『創価教育学体系』出版の3年前になって初めて出版されている（<表2>参照）。

補訂した牧口の『価値論』（創価学会 1953年）から、「創価教育学」から「創価学」への変更の意図を汲み取ることができるのではないかと。同書は、牧口の意を踏まえ「遺弟戸田城聖」が全面的に補訂したものである。1931年3月出版の『体系・第2巻』『価値論』以降も、牧口『価値論』は1944年11月の獄中における逝去の日まで深化し続けた。この二つの「価値論」を比較することによって、会の名称変更の意図も明らかとなろう。しかし、「創価学」という言葉も、それについての説明も戸田は語っていない。創価教育学に基づく自らの算術教育に「推理式」と命名したように、戸田は、「創価学」として表現すべきところを、「人間革命」という言葉で表現したのではないかと。同様に、創価大学創立者・池田大作も、牧口の『創価教育学』から発した創価教育の学校設立にあたり、「創価教育」をより広がりをもったものとして、「人間教育」という言葉で表現したのではないかと。これらは、次稿で詳述したい。（牧口の『創価教育学』の深化については、前掲拙稿、『創価教育』第4号、238頁を参照）

⁽⁷⁹⁾ 大日本高等女学会については、拙稿「創立者の大学構想についての一考察（1）—通信教育部開設構想とその沿革」（『創価教育研究』第5号）、創価教育研究センター、2006年）、21—42頁を参照していただきたい。

⁽⁸⁰⁾ 他にも同様の会として、「帝国教育学会」がある。

⁽⁸¹⁾ 『創価教育学大系』から『創価教育学体系』への名称変更、「創価教育学支援会」から「創価教育学会」への発行所の変更とともに、「城文堂」が「日本小学館」に社名変更することにも深い意味があると考えている。城文堂のマークは、ベル（鐘）であるが、日本小学館のマークは、漢字の「日」と富士山の組み合わせである。このことも、戸田の内面的変化を考える上で深い意味があると考えている。

<表 2> 1920年代に出版された「大系」と名のついた教育学の出版物

出版年	編著者・書名	巻数	出版社
1927—1928年	現代実際教育研究会著『現代実際教育大系』	全12巻	章華社
1927—1928年	大日本学術協会編『日本現代教育学大系』	全12巻	モナス
1927年	『文化中心新教授大系』	全15巻	教授研究会

「大系」を「体系」にわずか一文字変えることは、一見小さなことに見える。しかし、教育を科学的に捉えていこうとする牧口は、この「一歩」を踏み出すことができた。『教授の統合中心としての郷土科研究』を著し、教授の体系化に取り組んできた牧口であったからできたと言えるが、牧口の内的変化、彼の言葉でいえば、「生来の引込思案がなくなり（以下略）」があつて初めて踏み出すことができたのではないか。

7. 日蓮からの引用について。

『大系概論』の表紙裏には、日蓮がしばしば引用している以下の3つの文言が大きな活字で印刷されている⁽⁸²⁾。

依法不依人
無慈詐親是彼怨也
為彼除惡是彼親也

なぜ、牧口がこの文言を、『大系概論』だけでなく、『体系』においても引用しているのか。牧口の内的変化を丁寧に時間軸に沿って見ていくことによって、『大系概論』が1930（昭和5）年のいつ頃に著したものなのかも少し明らかになるように思われる。

8. 本文中の「創価」という言葉の使用について。

「創価」という言葉が、タイトルだけでなく、本文中に5カ所出てくる。あきらかに、同年に書かれた他の寄稿論文とは異なる。3. で述べたとおり『体系』出版の準備のために『大系概論』は作成されたからではないか。

以上から、『大系概論』は、『体系』出版のための原稿整理を主たる目的として作成されたと考えられる。その目的からすると、「創価」という言葉の誕生が、1928（昭和3）年10月から1929（昭和4）年3月（3D、4A）とした場合には、整合性が取れなくなる。そのため、言葉の誕生の時期は、戸田が「人間革命」で述べた1930（昭和5）年2月を含む1929（昭和4）年10月から1930（昭和5）年3月（4D、5A）の寒い季節に絞られる。

また、『大系概論』の作成時期は、1930（昭和5）年2月から5月と考えられ、その間に、「創

⁽⁸²⁾ 『体系』の中では、「依法不依人」は、第1巻（『牧口常三郎全集・第5巻』、157頁）、第2巻（同、361頁、363頁）に出てくる。「無慈詐親是彼怨也、彼除惡是彼親也」は、第2巻（同、371頁）、第3巻（『牧口常三郎全集・第6巻』、70頁）、第4巻（同291頁）に出てくる。さらに、「彼除惡是彼親也」は、第4巻（同346頁）に出てくる。

価教育学支援会」が結成された。また、『創価教育学体系』という書名、および、その発行所となる「創価教育学会」という名称は、同年のおよそ7月から10月に決ったと考えられる。

4. 『小学校長登用試験制度論』

a. 奥付についての疑義

次に、『制度論』の出版年について検討する。この検討には、牧口宅から特高警察によって押収され返却された同じ『制度論』の元版⁽⁸³⁾から複写された3種類のコピーを使用した。同書は、活版印刷の本文24ページで、表紙には「小学校長登用試験制度論 白金尋常小学校長 牧口常三郎」と印刷され、「押証第18号」と書かれた付箋が貼られている。

第一のコピーには、奥付はない。

第二のコピーの一枚目には、左半分に『制度論』の表紙、右半分に「新聞編集・資料室」というゴム印と「小学校長登用試験制度論 白金尋常小学校長 牧口常三郎著 東京 戸田城外 昭和4年9月8日発行 24P 22.2cm×15.2cm (押証第18号)」と書かれた資料カードが複写されている。

第三のコピーの最後のページに、以下の奥付があった。奥付は、裏表紙の位置と思われ、裏表紙の裏は白紙である。

昭和四年九月五日	印刷	(非売品)
昭和四年九月八日	発行	
東京府荏原郡大崎町字上大崎三三六		
編輯兼発行人 戸田城外		
東京市芝区白金台町一丁目四〇		
印刷者	高桑準策	
東京市芝区白金台町一丁目四〇		
印刷所	宝印刷所	

イ) 『制度論』の奥付の内容に対する疑義

第三のコピーの奥付には、表紙には題名の下に「白金尋常小学校長 牧口常三郎」と著者名が印刷されているにもかかわらず、著者名がない。「編輯兼発行人」は、戸田城外で、印刷者と印刷所が表記されている。「編輯兼発行人」という表記は、雑誌の奥付であれば考えられるが、単行本の奥付としては違和感がある。たとえば、『環境』第9号の奥付は、「編輯兼発行人 戸田雅皓」となっている。牧口は、自らの著作の出版だけでなく、雑誌の編輯兼発行人も何度か経験し⁽⁸⁴⁾、出版法とそれに伴う奥付の表記法についても充分知悉している。著者名がないのは、法律上問題ないとしても⁽⁸⁵⁾、表紙に明らかに牧口と明示してある著作に対して、奥付に「編輯兼発行人 戸

⁽⁸³⁾ この『小学校長登用試験制度論』は、現在所在不明。これ以外は見つかっていない。

⁽⁸⁴⁾ 牧口は、北海道時代は、北海道教育会の『北海道教育雑誌』、上京後は、茗溪会の『教育』、大日本高等女学会の『高等女学講義』、『家庭楽』、『大家庭』、先世社の『先世』の編輯兼発行人を経験している。

⁽⁸⁵⁾ 当時の出版法においては、著者名を「文書図画ノ末尾ニ記載」する必要はない。

田城外」と書くだろうか。これは、戸田が、「この牧口の著作は、私が編輯しました」と書いているに等しい。

このような表現をした理由として、『制度論』は、現行制度の批判であるので、現職校長の牧口に対する批判をかわすために、戸田が奥付にこのように書いたのだとするならば、表紙に著者名を書いているのだから、それは意味のないことである。

また、本当は、「発行人 戸田城外」とすべきところを、誤って「編輯兼発行人 戸田城外」とした可能性も考えてみたい。高桑準策が印刷者となっている図書・雑誌で奥付が確認できるのは、『制度論』以外では『家庭教育学総論』（1929年）、『指導算術』（1930年）、雑誌『環境』（1930年創刊）の3点である⁽⁸⁶⁾。『家庭教育学総論』、『環境』は、城文堂が発行所であり、『指導算術』は創価教育学支援会が発行所であるが、発行人は、すべて「戸田雅皓」である⁽⁸⁷⁾。この当時、戸田は、「戸田城外」を、単行本の著者名として、「戸田雅皓」を、（編輯兼）発行人として使い分けている。そのため、この見解も適切ではない。

以上のように、コピーされたこの奥付は、表紙以下の本文とは別の印刷物の奥付と考えられる。それでは、何の奥付か。1929（昭和4）年9月に印刷・発行された非売品で、編輯兼発行人が戸田城外の印刷物、つまり、戸田が著者にあたるほど積極的に編輯したものは何かとなると、それは時習学館で頒布されていたという算術学習のプリント集（後に『指導算術』になる）ではないか⁽⁸⁸⁾。牧口は、時習学館や模擬試験のプリントをメモ紙として使っており、それが特高警察による押収、返却の経緯の中で、ここに紛れこんだと考えられないだろうか。その際、『制度論』には奥付がなかった可能性も考えられる。

ロ) 『制度論』の表紙と裏表紙の外見上の相違点

次に、もうひとつ、第三のコピーの奥付が、『制度論』の奥付とは思えない点がある。それは、小冊子のため、右側が2カ所、釘止^{くぎとめ}で製本されているが、表紙と奥付のある裏表紙では、右側上部の釘止と下部の釘止の幅、正確には錆びている部分の間の幅が異なっている。第二のコピーの図書カードによれば、『制度論』の大きさは、22.2cm×15.2cmである。奥付のある第三のコピーは、全体の大きさが分からないが、横幅は、約13.7cmと思われ、約90%に縮小されている。

<表紙>

上部の釘止の錆びている部分の幅は、1.7cm、下部の釘止の錆びている部分の幅は、1.6cmである。その間は、4.0cmである。上部の釘止の錆びている部分の中心部から、下部の釘止の錆びている部分の中心部まで、5.6cmである。

⁽⁸⁶⁾ 『推理式読方指導 第五学年用』（1933年）も、城文堂から発行されているが、印刷者は西川喜右衛門（＝喜萬）である。初期の『推理式読方指導 第六学年用』は、城文堂から発行されているが未見。

⁽⁸⁷⁾ 『推理式読方指導 第五学年用（初版）』も、発行人は「戸田雅皓」である。

⁽⁸⁸⁾ 戸田は、「人間革命」に「その前の年（文意から1929年）に算術指導という八百頁に亘る大部の数学書をこしらえて居た」（前掲『人間革命』「人の心（三）」）と書いている。

<奥付のある裏表紙>

上部の釘止の錆びている部分の幅は、1.7cm、下部の釘止の錆びている部分の幅は、1.6cmである。その間は、4.9cmである。上部の釘止の錆びている部分の中心部から、下部の釘止の錆びている部分の中心部まで、6.5cmである。

上記「表紙」と「裏表紙」の上下2つの釘止の幅が、約0.9cm異なる。そのため、このコピーの「表紙」と奥付のある「裏表紙」は、同一の本のものとは考えにくい。「表紙」と「裏表紙」のコピーの縮小率が異なる可能性も考えて試したが、上下2つの釘止の幅を揃えると紙の上下の幅が合わなくなる。

記載内容とともに、このように外見上からも『制度論』のものとは考えられない奥付の日付と、『制度論』の「これは私が近く発表せんとする創価教育学の実際の研究の一節である」との文言によって、戸田が「人間革命」に記述した「昭和五年二月」を否定することはできない。

b. 『制度論』の出版時期

それでは、次に、『制度論』の本文から出版時期の特定につながる部分を抽出し、改めて同書の出版時期を考えてみたい。それは、次の3カ所である。

イ) 浜口雄幸首相の在任期間

第一は、浜口雄幸内閣について述べた次の一節である。

局面打開の重大なる使命を担ひて誕生せる新内閣は緊縮と質実を掲げて、以つて国策建直しの衝に当らんと苦慮しつゝあるの時、国民の一人として將た又第二の国民養成の重大使命を担へる教育者の一人として⁽⁸⁹⁾ (以下略) (下線筆者)

浜口首相の在任期間は、1929(昭和4)年7月2日から1931(昭和6)年4月4日までである。浜口首相は、張作林爆死事件(満州某重大事件)の責任をとって辞任した田中義一首相の後を受けて就任した。まさに、「局面打開の重大なる使命を担ひて」である。緊縮財政に努め、財政改革の先頭に立った浜口首相であったが、1930(昭和5)年11月14日、東京駅で右翼青年に銃撃され瀕死の重傷を負う。内閣打倒を狙う政友会は浜口の国会出席を執拗に求めたため、浜口首相は無理を押し国会に出席、それが原因で病状が悪化し、翌年4月に辞任した。

『制度論』には、「重大なる使命を帯びて誕生せる」「苦慮しつゝあるの時」とあることから、浜口内閣に対して牧口自身も期待を持って迎えた頃にかかれたと思われる。また、「誕生せる」、「しつゝある」という表現から考えると、同書は少なくとも1930(昭和5)年11月14日の浜口の銃撃事件前に書かれている。

⁽⁸⁹⁾ 『牧口常三郎全集・第8巻』(第三文明社 1984年)、330頁。

ロ) 牧口の教員在職期間

第二に、「国民教育の聖業に従事する将に三十余年、更に東京市にのみすら在職以来十有七年⁽⁹⁰⁾」とある。〈表3〉は、単純に、1929年、1930年及び1931年から奉職年を引いた数字である。「三十余年」は、北海道師範学校の附属小学校に勤めた時からの在職年数である。「在職以来十有七年」は、東京市の東盛小学校の校長に奉職してからの在職年数である。年数の数え方は2つあるが、当年も含めて数えた場合は〈表3〉の年数に1を加えることになる。どちらの数え方にせよ、『制度論』の発行は、1931（昭和6）年でないことは明らかである。

〈表3〉 牧口常三郎の1929年、1930年、1931年までの教員在職期間

牧口の勤務校と奉職年	1929年迄	1930年迄	1931年迄
北海道師範学校附属小・1893年	36年	37年	38年
富士見小学校 ・1909年	20年	21年	22年
東盛小学校 ・1913年	16年	17年	18年

ハ) 白金小学校の郡部からの通学者増加問題

第三に、『制度論』には、「我が白金小学校へ通学区域外殊に郡部より競うて入学せんとする者が年年歳々其の数を加へつゝある事に対する解決は多年の懸案となつてゐたが、本年度から特別指定寄附金を区へ納めるといふ交換条件により、漸く解決する事が出来た⁽⁹¹⁾。」（下線筆者）とあるが、その「本年度」がいつか確定できれば、発行年は特定できる。まず、白金小学校の資料及び当時の新聞を調査したが、特別指定寄附金について書かれた資料を探し出すことは出来なかった。

しかし、『制度論』のこの部分は、1932（昭和7）年7月に出版された『体系・第3巻』の「第4章 小学校長登用試験制度論」（以下、第3巻「制度論」と略記）にほぼ同じ文章が収録されている。牧口は、第3巻収録にあたり、時間経過があるので、『制度論』の下線部分の、「我が」を「余が前任地」に、「本年度」を「先年度」に、「解決」を「問題」に、「区」を「芝区」にと、4カ所を書き改めている⁽⁹²⁾。（表内の下線は筆者）

〈表4〉 『制度論』と第3巻「制度論」の記述の比較

『制度論』の記述	第3巻「制度論」（1932年）の記述
我が白金小学校へ通学区域外殊に郡部より競うて入学せんとする者が年年歳々其の数を加へつゝある事に対する <u>解決</u> は多年の懸案となつてゐたが、 <u>本年度</u> から特別指定寄附金を <u>区</u> へ納めるといふ交換条件により、漸く解決する事が出来た。	余が前任地白金小学校へ通学区域外殊に郡部より競うて入学せんとする者が年年歳々其の数を加へつゝある事に対する <u>問題</u> は多年の懸案となつてゐたが、 <u>先年度</u> から特別指定寄附金を <u>芝区</u> へ納めるといふ交換条件によつて、漸く解決する事が出来た。

⁽⁹⁰⁾ 『牧口常三郎全集・第8巻』（第三文明社 1984年）、332頁。

⁽⁹¹⁾ 同上、343頁。

⁽⁹²⁾ 『牧口常三郎全集・第6巻』（第三文明社 1983年）、92頁。牧口常三郎著『創価教育学体系・第3巻』（富山房 1932年）では、107頁。

第3巻「制度論」では、「余が前任地白金小学校」と言っていることから、牧口が麻布新堀小学校に転任になった1931（昭和6）年4月10日から、同校を退職した1932（昭和7）年3月31日までに同書は書かれている。また、『制度論』では、「我が白金小学校」と言っているので、『制度論』は、転任以前の白金小学校在職時に書かれている。「先年」は「すぎゆきし年、さきつ年（往年）」を意味する。「前年」が「まへの年」とするのに対し、前年以前も含んだ言葉である⁽⁹³⁾。

これが成り立つのは、

a. 第3巻「制度論」を執筆したのが、麻布新堀小学校在職中の1931（昭和6）年4月10日から同年12月であれば、「先年度」は、1930（昭和5）年度以前をいう。1930（昭和5）年度中は、白金小学校に在職している。そのため、『制度論』を書いたのは、1930（昭和5）年度以前ということになる。さらに、牧口が厳密に「前年度」と使わず、「先年度」という表現を使ったとするならば、1929（昭和4）年度以前となる。

b. 第3巻「制度論」を執筆したのが、麻布新堀小学校在職中の1932（昭和7）年1月1日から同年3月31日であれば、「先年度」は、1931（昭和6）年以前をいう。しかし、白金小学校に在職していたのは、同年4月10日迄なので、『制度論』を書いたのは、1931（昭和6）年4月10日以前となる。さらに、牧口が厳密に「前年度」と使わず、「先年度」という表現を使ったとするならば、1930（昭和5）年度以前となる。

まとめると、2つの記述の比較から、『制度論』は、牧口が白金小学校に赴任してから1931（昭和6）年4月10日までに書かれたことになるが、前項のイ）によって出版の時期は絞り込まれているので、1929（昭和4）年7月2日から1930（昭和5）年11月までに限定される。

次に、『制度論』の「我が白金小学校へ通学区域外殊に郡部より競うて入学せんとする者が年々歳々其の数を加へつゝある事に対する解決は多年の懸案となつてゐたが、本年度から特別指定寄附金を区へ納めるといふ交換条件により、漸く解決する事が出来た」（下線筆者）の下線部分に着目したい。

「漸く解決する事が出来た。」という表現には、長い間、通学区域外、殊に郡部より入学する者が、毎年増えていた問題を解決する事が出来たということである。「解決」といっても2つの意味がある。ひとつは、「制度上の解決」で、もうひとつは、数の減少という「実質的な解決」である。私は、それを、後者の「実質的な解決」、通学区域外からの入学者・転入学者の増加を抑えることができたと考えた。その理由は、<表5>の説明の後に述べる。

<表5>は、白金小学校の1925（大正14）年から1931（昭和6）年までの毎年3月の卒業式における、全児童数・修業児童数（1年から5年生）・卒業児童数⁽⁹⁴⁾を基に、児童数の変化を集計・整理したものである。

「当該年度の全児童数」は、「前年度の修業児童数（1年生から5年生）」＋「当該年度の校区内の新入生＋転入－転出数」によって構成される。この頃は白金小学校校区内で新入生および転出数が変動するような要因（大きな宅地造成等）はないので、「当該年度の全児童数」－「前年度

⁽⁹³⁾ 金沢庄三郎編『廣辭林（新訂205版）』（三省堂 1934年）、1157頁。

⁽⁹⁴⁾ 東京市白金尋常小学校『大正十四年以降至七年度 卒業式書類綴』

の修業児童数」により、「当該年度の校区内の新入生＋転入－転出数」の総数を算出すると、その年度の校区外からの転入数（新入生として入学する児童も含む）の概数が見えてくる。

<表5> 白金尋常小学校の児童数の変化

年度(卒業式年月)	修業児童						卒業児童					
	男	増減	女	増減	計	増減	男	増減	女	増減	計	増減
大正14年(昭和元年3月)	496	—	475	—	971	—	115	—	115	—	230	—
昭和元年(昭和2年3月)	523	27	488	13	1011	40	121	6	93	-22	214	-16
昭和2年(昭和3年3月)	637	114	590	102	1227	216	104	-17	98	5	202	-12
昭和3年(昭和4年3月)	707	70	638	48	1345	118	111	7	104	6	215	13
昭和4年(昭和5年3月)	745	38	686	48	1431	86	121	10	117	13	238	23
昭和5年(昭和6年3月)	795	50	696	10	1491	60	103	-18	111	-6	214	-24
昭和6年(昭和7年3月)	815	20	733	37	1548	57	161	58	128	17	289	75

年度(卒業式年月)	計(全児童数)						当該年度の校区内新入生＋転入－転出		
	男	増減	女	増減	計	増減	男	女	計
大正14年(昭和元年3月)	611	—	590	—	1201	—	—	—	—
昭和元年(昭和2年3月)	644	33	581	-9	1225	24	148	106	254
昭和2年(昭和3年3月)	741	97	688	107	1429	204	218	200	418
昭和3年(昭和4年3月)	818	77	742	64	1560	131	181	152	333
昭和4年(昭和5年3月)	866	48	803	61	1669	109	159	165	324
昭和5年(昭和6年3月)	898	32	807	4	1705	36	153	121	274
昭和6年(昭和7年3月)	976	78	861	54	1837	132	181	165	346

まず、全児童数に注目していただきたい。牧口が白金小学校の校長に就任したのは1922（大正11）年だが、1925（大正14）年3月から1931（昭和6）年3月までに、児童数が1201人から1837人と約1.5倍に増えている。その増加傾向に対して唯一減少しているのが、1930（昭和5）年4月から1931（昭和6）年3月までの1930（昭和5）年度である。牧口が、「漸く解決する事ができた」と安堵の表現ができるのは、<表5>の中ではこの期間だけである。1930（昭和5）年度の増減で、特徴的なのは、女子児童の増加はほぼ止まったが、男子児童の増加は減ったものの、それほどではないということである。そして、1931（昭和6）年には、男女とも増加傾向に戻っている。牧口が『体系・第1巻』「緒論」で述べているように、当時は、小学校から中等学校への進学は「入学難」「試験地獄」と呼ばれるほどであった。そのため子ども、特に男子には、お金を多少多く使っても良い教育を受けさせたいというのが親の心理であったと考えられる。

このデータから、『制度論』が出版されたのは、1929（昭和4）年度では、「解決」という表現が使えないので、1930（昭和5）年4月から1931（昭和6）年3月と考えることができる。しかし、新学期が始まったばかりの1930（昭和5）年4月では、「漸く解決する事ができた」という判断はできない。ある程度転入の増減が見えた以降ではないか。

ハ) を検討するにあたり、文中の「解決」には、「制度上の解決」と数の減少という「実質的な解決」の2つの意味があり、筆者は後者と考えると述べたが、以下の理由による。牧口は、『第3巻』「制度論」で、『制度論』の最初に出てくる「解決」を「問題」に改めている。これは、ひとつの段落に2度「解決」という言葉が出てくるので、言葉を置き換えたという解釈もあるが、ここに牧口の微妙な心理が働いていると考える。『制度論』で「解決」と使ったのは、文の後の「解決」を含め実質的な区域外からの入学者数の減少を意味していた。当然、そのためには、前年度に制度が承認され、ある程度周知もされていた。しかし、それを「問題」と置き換えたのは、『第

3巻』「制度論」を著わす時点で「解決」という表現を使うことにためらいが生じたからではないか。〈表5〉で明らかのように、1931（昭和6）年度には、区域外からの入学者数は増加に戻っている。そのため、最初の「解決」を「問題」に変え、それにより後の「解決」は、「制度上の解決」と取れるようにして事実との整合性をとったと考えられるからである。

『制度論』の出版時期について、もう少し考えてみたい。『制度論』の牧口の肩書は「白金尋常小学校長」であり、「大系著者」というような大げさなものではない。しかし、『大系概論』が孔版なのに対し、『制度論』は本文24ページの小冊子ながら活版印刷である。テーマも、「小学校長登用試験制度論」という現行の教育制度の批判とも受け取れる内容である。そのことから、『制度論』が書かれた時期として考えられるのは、

第一に、牧口の教育学の全体像と骨格が明確になり、また、その教育学の出版に対して理解と応援してくれる人々も続々と集いつつある『体系』出版前、「近く発表せんとする創価教育学」と書ける時期である。

第二に、牧口は、『体系・第1巻』の教育学組織論、教育目的論、『体系・第2巻』の価値論の校正作業を短期間に集中して行わなければならなかった⁽⁹⁵⁾。それをほぼ終えた1931（昭和6）年3月頃、第2巻を出版する頃である。『制度論』を創価教育学支援会の有力者などに配布して、意見を求めるためである。その場合、「これは私が近く発表せんとする創価教育学の実際的研究の一節である。」の、「私が近く発表せんとする」は、「創価教育学」でなく、「創価教育学の実際的研究（＝第3巻「教育改造論」）の一節」と読める。そうすれば、『制度論』の出版は、『体系・第1巻』出版以降でもおかしくはない。

しかし、牧口は、浜口内閣について「重大なる使命を帯びて誕生せる」「苦慮しつゝあるの時」と書いている。1930（昭和5）年11月の銃撃事件以降にこのような書き方をするだろうか。そう考えると、第二の可能性は消え、『体系』出版の前ということになる。さらに、『制度論』の牧口の肩書が、「大系著者」でなく、「白金尋常小学校長」となっていることから、『大系概論』作成前に印刷された可能性を指摘できるかもしれない。しかし、これは、結論を急がず、今後の検討課題としたい。

以上、『制度論』の奥付は別の印刷物のものであるとして、改めて出版時期を、1930（昭和5）年4月過ぎから1930（昭和5）年11月と考えた。このことは、1 b. ロ）で紹介した美坂『牧口常三郎』が、「1930（昭和5）年2月」を退けたふたつの根拠のひとつがなくなったということである。

⁽⁹⁵⁾ 前掲「人間革命」「人の心（三）」（『聖教新聞』第42号、1952年6月20日）、1面には、「牧田先生と三十年來の友人である富山房の生沼支配人も我が子の育つ様に絶えざる声援をなされた、生沼大蔵^(マツ)氏の紹介でこれが組版にかゝった精興社の主人公も永く生沼さんにひきたてられているという点でカーパイの腕を振ってくれた。精興社の主人である西川^(マツ)さんがたゞこぼし抜いたのは牧田先生が自分の原稿が気に入らないと四辺も五辺も組み直しをさせる事でこれには悲鳴を上げてしまった」（下線筆者）とあるように、牧口は念入りに校正している。当時の精興社の社長は白井赫太郎。

5. 1929（昭和4）年の牧口自筆年賀状

次に美坂同書が第二の根拠とした1929（昭和4）年の牧口自筆の年賀状について述べておきたい。1 c. イ）で述べた

（1）最初に『体系』原稿の整理を手伝った須藤一の上京は、岩見沢尋常高等小学校を1928（昭和3）年3月に退職した後である。

（2）「創価」という言葉が生まれたのは、火鉢が必要な季節である。

と、1929（昭和4）年の年賀状に「創価」という言葉があることは、言葉の誕生が、3 D=1928（昭和3）年10月から12月の期間であれば満たすことができる。しかし、この時期に「創価」という言葉が生まれたのでは、3 b. で述べたように1930（昭和5）年に作成された『大系概論』の目的との整合性は取れない。

困ったことに、この年賀状については実物どころか、その画像すら確認できない。当然、誰に宛てたものかも不明である。1987年に出版された『牧口常三郎全集・第10巻』には、書簡・断簡類が収録され、同全集の編集委員には、美坂『牧口常三郎』の編集従事者も参加しているが、この年賀状は収録されていない。

2 a. で述べたとおり、1928（昭和3）年には、後に『創価教育学体系』となる全体の構想は形成されていたので、年賀状の文面に「価値創造の教育学⁽⁹⁶⁾」というような書き方をすることは考えられる。もし、1928（昭和3）年の年末に『創価教育学』の研究が進んでいる」と書かれたこの年賀状が再発見されれば、本稿の3 b. の『大系概論』作成の目的に関する考察だけでなく、本稿全体の立論も否定されることになる。しかし、1929（昭和4）年のこの年賀状に、「創価」という言葉が存在していたかどうかを確かめることはできない。

6. 『聖教新聞』連載の妙悟空著「人間革命」

a. 妙悟空著「人間革命」執筆の背景

戸田は、1948（昭和23）年7月に「牧口先生伝」の編集に着手しようと考え、自身が代表になって編集委員会を発足させている⁽⁹⁷⁾。その後の活動は不明だが、「牧口先生伝」は出版されていない。2年後の『大白蓮華』第12号（1950年11月）には、「牧口先生御伝記特集」が組まれている。しかし、伝記と言えるものは原島宏治が親近者の談話を元にした3ページにすぎず、内容も談話をそのまま載せているため、正確に書かれているとはいえない。後の17ページは、資料を並べ

⁽⁹⁶⁾ 前掲「人間革命」牧田先生（四）には、「先生の価値論は、価値を創造すると云うのですから」と戸田が述べている。

⁽⁹⁷⁾ 『価値創造』第15号（創価学会 1948年6月）、8面には、『牧口先生傳』の編集に着手」として、「恩師牧口常三郎先生の尊い御事蹟については、その資料が戦時中の弾圧により殆んど散逸した現状であり、先生の遺弟としてこの儘放置することは到底忍びえないところであつたが、今回先生の伝記を編集刊行することになった。よつて七月二十日の幹部会で編集委員が指名され、同三十日午後三時から第一回の打合せ会が日本正学館で開催された。今後毎月第一土曜日の午後編集委員会が開かれる予定であり、編集委員は次の通りである。代表 戸田城聖、矢島周平 委員 石田忠三、和泉ミヨ、小泉隆、小平芳平、辻武寿、原島鯉之助」とある。

た簡単なものである。戸田は、自らの経営する会社の営業停止が学会に波及しないようにとの配慮から、1950（昭和25）年8月24日には、創価学会理事長辞任の意向を発表した。そのため、この『大白蓮華』第12号には全く登場しない。「牧口先生御伝記特集」は、編集長の小平芳平、原島宏治等によるものである。

その後、池田大作青年の尽力により戸田の会社の苦境は好転する。そして、翌年の1951（昭和26）年5月3日に、戸田は、創価学会第二代会長に就任する。『聖教新聞』に「人間革命」が連載されるのは、その2週間前に創刊された『聖教新聞』（4月20日付）からである。ここでは、戸田が牧口に出会って以降のことを、口述筆記という形で書き綴っている。その中には、『体系』の出版、牧口を退職・転任させようとする東京市教育局の動きとそれに対する戸田の対応、創価教育学会の活動と複雑な人間模様、そして、不敬罪と治安維持法違反の容疑による検挙と厳しい取調べの様子から獄中の悟りまでを克明に書き残している。妙悟空著「人間革命」は、戸田の構想した「牧口先生伝」の具体化であり、牧口と戸田の師弟の歴史そのものではないだろうか。

牧口は、1936（昭和11）年4月30日の創価教育学会総会において、「私は創価教育学の研究所長として仮りに本会理事長に位置し、余と濫觴時代より多年本会樹立に際して、粉骨砕身その衝に当つて居る戸田城外君は常務理事として、他の役員諸君と共に活動はして居る⁽⁹⁸⁾」（下線筆者）と語っている。

また、稲葉伊之助⁽⁹⁹⁾は、「（創価教育学会は、）最初は先生一人、お弟子一人、即ち、牧口先生と戸田先生のお二人から始まったのでありまして⁽¹⁰⁰⁾」と、また、西川喜萬も、「学会創案は牧口先生と此れが唯一の弟子たる戸田先生との師弟関係による⁽¹⁰¹⁾」と述べているように、『体系』が出版された1930（昭和5）年前後のことは、牧口、戸田の二人しかわからない。「人間革命」は、その当事者によって書かれた第一級資料である。ここから何を取捨し汲み取るかは、今後の研究者に託された課題といえる。

b. 『体系』出版前後の記述が混乱しているに見える理由

「人間革命」は小説であり、論文に引用する資料としての価値はないといわれる。しかし、『聖教新聞』に連載されながら、単行本に収録されなかった部分、特に、『体系』の出版前後は、牧口（＝牧田）と戸田（＝巖）を除き、主要な人物は実名で語られている。前にもふれたが西野辰吉は、

戸田城外はのちに「人間革命」という小説を『聖教新聞』に書いているが、この物語では、牧口は牧田、戸田は巖さんで、牧口が「創価教育学体系」の著作にとりくむようになる場面もえがかれているけれども、牧口の退職のいきさつなどとごっちゃになって、時間の経過が正確にえがかれているわけでは

⁽⁹⁸⁾ 「総会議事記録」『新教』第6巻第6号（日本小学館 1936年）、149頁。

⁽⁹⁹⁾ 稲葉は、1930年2月ごろ、牧口の勧めで入信。娘の貞子は、1939年、牧口の三男洋三と結婚。

⁽¹⁰⁰⁾ 「開会の辞」『価値創造』第4号（創価教育学会 1941年12月）、2頁。原島宏治「創価学会二十余年の歴史」『聖教新聞』第26号（聖教新聞社 1952年1月1日）、2面で引用。

⁽¹⁰¹⁾ 「学会の経過報告」『価値創造』第7号（創価学会 1947年11月）、20頁。

ない。(下線筆者)

と述べているが、その通りであろうか。西野は、戸田が「人間革命」には書いていないことをいくつか挙げたうえで、「牧口の退職のいきさつなどごっちゃになって、時間の経過が正確にえがかれているわけではない」などと述べているが、西野の記述にも誤りや不十分な点が散見される。むしろ、そのように見えたのは、当時の状況を時間軸に沿って正確に把握していないから起ったのではないか。これは彼の責任ではない。彼が伝記を描くにあたってその土台とした部分の脆弱さにその因がある。むしろ西野は土台の不十分な部分を指摘し、問題提起してくれたのである。

彼がそのように感じた最大の要因は、退職のいきさつではなくて、牧口・戸田の日蓮仏法への帰依とその信仰の深まる過程が正確に検証されていないことにある。「創価教育学会」という名称がなぜ生まれたか、そして、その活動がどのように始まったか、空白となっている部分をひとつひとつ明らかにすることが正確な創価教育の歴史を構築する上で重要な課題といえるだろう。

さいごに

本稿においては、「創価」という言葉の誕生の時期は、まず2つの点から、1 c. イ) で分類した3 D、4 A=1928 (昭和3)年10月から1929 (昭和4)年3月まで、もしくは、4 D、5 A=1929 (昭和4)年10月から1930 (昭和5)年3月であると述べた。次に、『創価教育学大系概論』の出版年を確定し、その上で同書は牧口の教育学の全体構造を原稿整理者に伝えるために作成され、その目的に照らすと、前者の時期に「創価」という言葉が誕生したのでは整合性が取れないと述べた。次に、通説となっている『小学校長登用試験制度論』の出版年月日の誤りを指摘し、代わりにおよその出版時期を提示した。牧口自筆の1929 (昭和4)年の年賀状については、文面の検証はできないが、この時期に「創価」という言葉が誕生したのでは、『大系概論』作成の目的と整合性が取れないと述べた。

以上の検証によって、戸田が「人間革命」で示した1930 (昭和5)年2月に「創価教育学」が生まれたとする記述を否定してきた根拠がなくなったので、「創価」という言葉の誕生は、当事者である戸田の記述に従い「1930 (昭和5)年2月」に戻るべきであると考え。なぜなら、「人間革命」は、創価教育学の発祥期を知る上で当事者の証言という一級資料であり、そのことについてそれ以外の文献は存在しないからである。

「創価」という言葉が誕生した後は、以下のようになる。

1930 (昭和5)年2月に「創価」という言葉が誕生し、牧口と戸田は、直ちに須藤一に牧口の原稿の整理を依頼した。しかし、その3カ月後の4月ないし5月からは、戸田が代わって原稿整理にあたる。『指導算術』の出版は、同年6月である。同書の校了を終えるか終えないうちに、戸田は『体系』の準備に没入していく⁽¹⁰²⁾。その中で、「創価教育学支援会」が誕生し、全12巻の出

⁽¹⁰²⁾ 1930 (昭和5)年夏、千葉県千歳海岸の時習学館の臨海学校の参加者の一人である石渡直蔵は、この年の夏は戸田の顔をほとんど見なかったと証言している。

版物を「創価教育学大系」とした。

その後、牧口の再三にわたる校正があり、その間に、全12巻の名前は、『創価教育学体系』と決まり、その発行所としての「創価教育学会」が、牧口と戸田の二人で発足することになる。戸田は格別の感慨を以って11月18日を迎えた。「人間革命」には、「涙ぐましいような師弟の結びつきと美しい友情のおかげで教育学体系第一巻が出版されたのは昭和五年十一月であった、(中略)かげの力であった巖さんは誰一人ほめもしなかったが一人ニヤニヤとして居た。」と書いている⁽¹⁰³⁾。

この検討過程で、『創価教育学体系』出版前後について、新たに次の4つの課題が浮上してきた。

第一に、牧口は、最初にいつ頃「創価教育学大系」という名称を考え、それをいつ頃、なぜ、「創価教育学体系」と変更したのか。

第二に、牧口の著書の出版を支援する目的で、「創価教育学支援会」が誕生したが、それは、いつ頃どのようにして誕生したのか。そして、1930(昭和5)年11月18日に出版された『創価教育学体系・第1巻』では、発行所として「創価教育学会」が登場する。牧口は、なぜ「創価教育学会」の名称を考え、どのような活動を考えていたのか。

第三に、『聖教新聞』連載の妙悟空著「人間革命」は、創価教育学会創立の当事者である戸田の貴重な証言である。これを、厳密に検証していけば、さらに見えてくるものがあるはずである。

第四に、『体系』出版前に、牧口は日蓮仏法に帰依した。戸田もまた、牧口に続いて帰依した。その時期と入信動機、その後の日蓮仏法に対する理解の深まりと具体的実践はどうであったのか、いまだ十分に明らかになっていない。この過程は、『創価教育学体系』第1巻から第4巻の出版時期に重なる。直接的には、牧口の創価教育学は、日蓮仏法とどのような関係にあるのか、また、大きくは、牧口が生涯をかけて形成してきた彼の人道主義の思想に、日蓮仏法がどのような影響を与えたのかということにも関連してくる。

1930(昭和5)年2月に「創価」という言葉が生まれ、そのあと牧口と戸田によってどのように歩みはじめることになるのか、その解明を今後の課題とさせていただき、本稿を終えることとしたい。

⁽¹⁰³⁾ 前掲「人間革命」「人の心(三)」。